



始



The Social Principles of J

Rauschenbusch

325
324

325-324



栗原基
著

の
社
會
訓

大正
7. 12. 19
内交

序

原著者ウォルター・ラウシエンブシは一八六一年十月四日獨逸系の米國人として生れ、二十三歳ロチェスター大學のA. B.の學位を得、越えて一九〇二年同大學から神學博士を送られた。一方一八八六年から浸禮派の牧師となり、或は獨逸移民の教育に従事し、獨逸人牧師を指導したが、一九〇二年以來ロチェスター大學の教會史の教授となつた。其著書として有名なるは『基督教と社會危機』、『社會覺醒の祈禱』、『社會組織の基督教化』、『社會的福音の宗教原理』等である。彼が米國社會の改善の爲めに盡せしことはこれらの書名だけでも推察することが出来る、又常に世の先覺者として光彩を放つて居つたが、今夏（一九一八年）八月天の招命を受けて斯世を去つたのは彼を知る人の等しく悼む所である。

此書は寧ろ『耶蘇の社會原理』と譯すべきものなれども、聊か思ふ所ありて表

題の如き名稱を與へた。著者は此小著によりて平生自己の懷抱せる社會的思索と信仰をば聖書に示されたる基督の教訓によりて立證しやうと試みたもので、謂はゞ基督の社會指導者たることを明かにしたのである。特に一方我等は教養によりて個人生活の眞價を發揮すると共に、一方人間の棲息所なる社會をして人道と正義のために安全なるものたらしめんと努力せねばならぬ。しかも何處に其標準を求むるかと云はば、基督の教訓以外に之れを求むることは出来ない。況んや世界大戰の終局を迎へ、茲に世界改造の幸福なる義務を負はされたる現代人は再び基督の古き而かも永遠に新しき聖訓を読み直ほす必要がある。此光榮ある事業に參加する者は必らずや此書によりて高き理想と不斷の靈感を與へらるゝであらう。

一九一八年十一月

世界の砲煙收まり
平和の曙光を仰ぎつゝ

京都洛東に於て

譯者 識

目次

第一部 耶穌の社會公理

- 第一章 人生の價値……………一
- 第二章 人間家族の團結……………三〇
- 第三章 民衆の擁護……………五五

第二部 耶穌の社會理想

- 第四章 神國と其價値……………六八
- 第五章 神國と其活動……………一一〇
- 第六章 新時代と新標準……………一三九

第三部 社會の反抗的勢力

第七章 奉仕の指導……………一六五

第八章 私有財産と公共善……………一九八

第九章 宗教の社會的試験……………二二四

第四部 争鬭の勝利

第十章 罪惡との争鬭……………二七二

第十一章 社會訓としての十字架……………二八六

第十二章 概括及び挑戦……………三一九

耶蘇の社會訓

第一編 耶蘇の社會原理

第一章 生の價值

神聖なる生命と人格

はじめは耶蘇基督を如何様に考へて居るも勝手なれども、先づ其教訓を研究するに當りて必要なるは、敬畏の精神を以てこれに着手せねばならぬことである。彼は短き一生の間、人間の至つて纖弱なる力に頼りて、我等のために永久に神と人生に對する理解に新しき標準を示し、而してやがて震天動地の勢力となるべきものを扶植するに至つた。

今日に傳はれる彼の教訓は、斷片に過ぎぬけれども、其斷片には無盡藏の生命
 力がある。此研究に於て期する所は、出来ることならば、此等の斷片を材料とし
 て、耶蘇の精神に宿つて居つた所の倫理的教訓の根底となつたものは、果して
 何物であつたかを穿鑿しようとするのである。彼の此方面の思想はこれを他の思
 想に比すれば、比較的十分に理解されてない憾みがあるけれども、今日程其必要
 を感ずることは尠くない。今之が研究に着手するに當り、我等は宜しく或る偉大
 なる事件を取扱はんとする念慮を抱き、これによりて自己の生活を指導する原動
 力を握らんとする希望にあこがれなければならぬ。耶蘇基督の人格と思想に發
 したる社會的意義を明かにし、更らに之れを以て彼が我等に直接關係ある現代
 の社會的經濟的生活に對して何物を要請し給ふかを吟味するのが、當面の仕事
 である。

耶蘇は其接したる人々の生命と人格とを如何に觀給ふたか。彼は人々を結合す

る社會關係を如何に見られしや。現在社會の不平等と苦痛に對する彼の觀照は
 果して如何。以上三つの問題に對する彼の確信の根本義となれるものを明かにす
 れば、われらは彼の社會的教訓の鍵を握つた譯である。最初の三章は即ちこれが
 研究である。

日課

第一日 子供の價值

イエスにさはられんため、人々孩提をつれ來りければ、弟子等そのつれ來れる者をいましめたり。
 イエス之れを見て怒を含み、彼等に云ひけるは、孩提を我に來らせよ。彼等を禁むる勿れ。神の國に
 居る者は斯くの如き者なり。誠にわれ汝等に告げん、凡そ孩提の如くに神の國を承けざる者は之れに
 入ることを得ざるなり。即ち彼等を抱きて、手をその上にのせ之れを祝せり。——マカ十、一三一—一六。

人の最も單純なる姿は子供である。子供を可愛がる心は、恐らく社會精神の最

も純潔なる發現である。子供は耶穌の注意を惹くに足らぬものだとして弟子達が考へたので彼は怒を發せられた。大人の利己的慾望に思ひを注がれては、子供の中には一種神聖なるもの、即ち神の國の面影のあるのを認め給ふた。子供等は浮世の塵に穢された連中よりは一層神の國に近いのである。耶穌にはこれらのいと小さき者の一人に聊かにも精神上の損害を與へることが、實に言語道斷の罪惡と思はれたのである。(マタイ十八、一―六參照)

一社會の道德的標準をば兒童労働と嬰兒死亡の統計表によりて判斷するは正當であるか。
 青年が好んで己が弟を苦しむるは何故であるか。
 此聖句を人生の神聖を教ゆる主義とは人種改良學に如何なる關係を有するや。

第二日 癲病患者に對する同情

イエス山を下りし時、多くの人々これに従へり。癲病の者來り拜して云ひけるは、主もし旨に適ふときは我を潔くなし得べし。イエス手を伸べ彼につけて、わがこゝろに適へり、潔くなれと曰ひければ癲病たちちに潔まれり。イエス彼に曰ひけるは慎みて人に告ぐる勿れ。唯ゆきてものを祭司に見せ且モーセが命ぜし禮物を獻げて、彼等に證據をせよ。――マタイ八、一―四。

耶穌が何時も自ら進んで病氣を癒されたのは、即ち之によりて同胞に奉仕されたのである。彼の病人に接した如何にもおのづからなる温情は、人生の神聖を思ふ心の發表である。手には指なく、關節はくづれかゝつて居る癲病人の姿を見ては、見るも慄然とするし、感染されては困まると云ふ恐怖心も起る。公衆は之れを追ひ拂つて荒地に隔離し、若し其處を出れば石を投げつけてやる。(マル・ハル) (邦文譯『星をめぐって』) 母と妹の條下に能く此光景を叙して居る。耶穌は彼を癒やしたのみならず、其深き慈悲心を以て一手を伸べ彼につけ「たのである。最も見すばらしき人間でも彼には價値があつた。

病氣を治療豫防する業務の社會的併びに道德的意義は如何なるものか。
生の神聖に對する強き信念を懷くことは、斯かる業務に従事する人々に如何なる影響を與へるか。

第三日 輕蔑の批難

古への人に告げて殺すこと勿れ、殺す者は審判にあづからんことあるは汝等が聞きし所なり。されどわれ汝等に告げん、凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判にあづからん。又その兄弟を愚者よといふ者は集議にあづからん。又狂妄者よといふ者は地獄の穴にあづかるべし。——マタイ五、二二—二三。

耶蘇は山上の垂訓に於て、社會道德の標準を一層高くすべきことを要求し給ふた。彼は憤怒と憎惡の感情をば、舊制度の殺人と同じ程度に考ふべきことを命じ、何人にも兄弟を罵詈譎する者あらば、宜しく之れを裁判沙汰にせよと云はれ

た。勿論此言は意味を強めるための言ひ方であつて、彼の言はんとする所は、憎惡と輕蔑とは殺人同様の取扱ひを受くべきものであると云ふのである。人を罵り誘ふことは、人間の價値を否定し、其自尊心を損ひ、當然他より受くべき尊敬を掠奪することとなる。耶蘇が斯かる行爲に極力反對した所以のものは、自ら人格の價値を認め給ふたと云ふ證據である。

學校生活に於て己が自尊心を他人の人格を尊重する心を左右するものは何なるか。
工業界に於ては如何。

第四日 排斥された者の擁護

さて税吏と罪ある者どもイエスに聽かんて近よりければ、マリサイのひと學者だちつばよきて曰ひけるは、此人は罪ある人に交はりて共に食せり。イエス此譬を彼等に語りて曰ひけるは、汝等のうち誰か一百の羊あらんに、若し其一を失はば、九十九を野におき、行きて其失ひし羊を得るまでは、

第一章 生の價値 (第三日)

尋ねざらんや。尋ね得ば、喜びて之れを己れの肩にかけ、家に歸へりて、其友と其隣人とを召び集めて曰はん、我と共に喜べ、わが失へる羊を得たればなり。われ汝等に告げん、かくの如く一人の罪ある人悔改めなば、悔改むるに及ばざる九十九の義人よりは、尙天に於て喜びあらん。また婦のうち誰か金銭十枚をもち、其一枚を失はんに、燈火を燃して家を掃除し、之を獲るまではれんころに尋ねざらんや。尋ね得ば、其友と其隣の人々を召び集めて曰はん、我と共に喜べ、わが失へる金銭を獲たればなり。われ汝等に告げん、かくの如く、一人の罪ある人悔改めなば、神の使の前に喜びあるべし。——ルカ十五、一一〇。

猶太には教會から破門された連中があつた。彼等は律法を嚴守することが出来ない所から、自然之れを放棄したのである。敬虔家は自らの敬虔を笠に被て、當然彼等を疎んずべきものと思つた。併し耶蘇は此俗習を破つた。彼が敢て此舉に出でた理由は何であつたか。何故にパリサイの人が避けたのに耶蘇は進んで税吏と交はつたのであるか。

現代社會にありて「税吏と罪ある人」に相當するものは何人か、之に對する信仰家の態度は如何。我等の學校生活にありて、學生の輕蔑する人々は如何なる社會の者か、又これを輕蔑する理由如何。教育にパリサイ主義なるものありやこれを說明せよ。

第五日 罪人の問題

それ人の子は失ひし者を尋ねて救はんために來れり。——ルカ十九、一。

此の言葉は耶蘇が自ら自己本來の眞面目と信じ使命と感じた所を告白されたものである。彼が世に來たのは社會改善と道德的救護とのためであつた。苟くも人として生を享けた者は、避け得べくんば決して自ら破滅すべきものではない。耶蘇は進んで助けを求める人々を喜んで助けられたのみならず、尙進んで其跡を

ついで行かれた。「失はれた」人は神聖にして價值あるものなれば、滅多に失つてはならなかつた。

基督教の救濟的精神と萬國慈善矯正會の活動との關係はいかに。

學校社會は其「犯罪人」を何と見るか。陋劣なる娛樂にあこがれ、輕佻浮薄なる名譽心に逸やる者あらば、學校社會の高潔分子に之れを矯正せんために如何なる手段を講ずるや。

第六日 常道を超越して

それ天國は朝早く出で、葡萄園に工人を雇ふ主人の如し。工人には一日銀一枚を與へんと約束をなし、彼等を葡萄園に遣せり。又九時頃出で、街にむなく立てる者を見て、汝等も葡萄園に行け、相當の價を與へんと彼等に云ひければ即ち行けり。又十二時三時頃出で、前の如くなせり。五時頃出で、又ほかの立てる者に遇ひて云ひけるは、何故終日ここにむなく立つや。これに答へて云ひけるは、我等を雇ふ者なきによりてなり。彼等に云ひけるは汝等も葡萄園に行け。相當の價を得べし。日

暮る、時葡萄園の主人その家宰に云ひけるは働きたる者等と呼ばて後に雇へる者を始めし先の者まで價をばらへよ。五時ごろに雇はれし者ども來りて銀一枚づつを受けたり。先の者ども來りて我等は多く受くるならんと思ひしに、又銀一枚づつを受く。これを受けて主人をうらみつぶやきけるは、此後のもの、働きたるは一時ばかりなるに終日くるしみをあひ、暑さにあへる我等と等しく之をなせり。主人その一人に答へて云ひけるは、友よ、我汝に不義をせず、汝と銀一枚の約束をなしたるにあらずや。汝のものを取りてゆけ、われ又この後の者にも汝の如く與ふべし。我物を以てわが思ふ如くなすは宜らずや。わが善きによりて汝の目あしきか。かくの如く後の者は先に、先の者は後になるべし。それよばるゝものは多しと雖、選ばるゝ者は少なし。——マタイ、二十、一一一六。

猶太教は合法主義であつた。律法に従ふと多ければ、従つて多くの應報を受けるのが、神とイスラエルとの間に出來た契約なりと看做されて居つた。これは理論的には正しかつたけれども、實際上上流社會や餘裕ある者のみが特別の便宜を得た。何となれば律法の一畫をも守らうとすれば、相當に時間と費用がかゝ、

る。此譬喩にありては、傭主は常道の標準を超えて、博愛的精神の一層高い標準に進んで行つた。十一時に來た連中は働く覺悟して居つた。彼等は食つて活きて行かなければならなかつたのである。そこで主人は暮す丈の勞銀を取らしたいと思つて、其通りにした。放蕩息子の譬喩にありては、父は常道以上のことを息子にしてやつた。父親としてはさもあるべきことである。此處で傭主は傭主以上のことをしたのは、人なるが故である。兩者共に其關係して居る人生の價値の觀念に基づいてやつたのである。耶穌が斯かる譬喩を考へ出したのも、やはり人生の價値と神聖とを認めたとのである。

他を評價するに當りて、我等に對する其實益に依るか、或は人間としての興味と價値の觀念に依るか。家庭、親戚、教師と友人、わが爲に奔走し呉る、人々などを思ひ浮べて、我等は果して何人に對して人間としての道を盡しつゝあるやを考へ見よ。

第七日 耶穌の禮讓

味爽また聖殿に入りけるが、民みな彼に來りければ、坐りて彼等を教ふ。爰に姦淫をなせるまき執へられし婦ありけるが、學者とパリサイの人これをイエスの所につれ來り、群集の中におき、いひけるは師よ此婦は姦淫をなしたる時、そのまゝ執へられし者なり。かくの如き者を石にて擊殺すべしと、モーセ律法の中に命じたり。汝は如何に言ふや。かくいへるはイエスを試みて、訟の由を引出さんさおもへるなり。イエス身を屈め、指にて地に畫けり。彼等がしきりに問ふにより、イエス起ちてこれに云ひけるは、汝等の中罪なき者まづ彼を石にて撃べしと云ひ、また身を屈めて地に畫けり。彼等これを聞きて其良心に責められ、老者を始め少者まで一人々々に行き、唯イエス一人残る。婦は集りの中に立てり。イエスこれに云ひけるは我も汝の罪を定めず、行きて再び罪を犯す勿れ。

ヨハネ八、二一一。

こんな露骨極まれる境遇に處する手段として、これ以上紳士的な遣り方はあつたらうか。此婦人は想像し得る範圍内で最も傷ましい目に遇ひ、萬人環視の中に

て罵詈誶せられ、名譽も自尊心も蹂躪され粉砕されて仕舞つた。耶蘇は人格の力と人を御する無上の辣腕とによりて、辛ふじて婦人の石で撃殺されるのを保護した。彼は人々の急所を衝き、其良心を刺戟して、過去の罪惡を思ひ浮ばせ、婦人に對する同情の念を起さしめた。彼が婦人丈けと居残つた光景は、如何にも温情と峻酷とが伴つて居る。婦人は確かに自分を虎口より逃れしめた不思議な友人を末永く記憶したであらう。何故耶蘇は二度まで地に眼を向けたか。彼は婦人の恥辱を見るのが恥かしかつたのであるまいか。

斯かる突飛な悲慘事に際會して、始めて人の眞面目が試みられるものである。耶蘇の禮讓、よしや人が恥辱を受けて居つても、其人格を尊重して居ることが、茲に十分に發揮された。我等も如何に苦心すれば、斯かることに際會して、能く耶蘇の行爲に倣ふことが出来やうか。常に耶蘇に靈的接觸をなしたならば、庶幾くは啓發される、こゝがあるであらう。

一週間の研究

以上研究した聖句は歸納的材料である。疑ふまでもなく耶蘇は人類同胞に對ししおのづからなる愛情を懷き、個人の神聖に對して深き洞察を感じられた。不具や犯罪も人の貴き價値を侮ますに足らなかつた。人を躓かして心靈の墮落を招き或は之れを輕んずることは彼の最も蛇蝎視し給ふ罪惡であつた。

人生に對する斯かる好感は普通一般の人々の有する社交的本能に基づいて居つた。唯耶穌にありては此觀念が至つて強く、其見識も活動も悉くこゝに發した。かくして彼は此愛の本能を意識的に徹底的に認めて、之れを社會訓の權威となした。これ丈けでも彼は優に斬新なる人物として頭角を顯はし、人類の新發展に向

つて豫言的な且獨創的な地歩を占むるに十分であつた。

耶穌は此社會的情感の純美なる確信を何處より得來つたか。これは單に彼の天
成の麗質に歸すべきか。古來哲人は財産、門閥、權勢、教養、乃至美貌によりて
人を評價した。獨り耶穌は人を人として尊び、美はしい附屬物の如きは一切之を
眼中に置かなかつた。彼は人本位であつた。「人生の運命を洞察すること深ければ
深き程、其神聖なる價値が一層明かに感ぜらるゝ」とはロツツエの言葉である。
耶穌がその交はりたる凡ての人に對して懐ける敬愛の念は、彼が人生と其運命と
に對する極めて切實なる宗教的洞察に歸すべきものである。併し此洞察は何處か
ら來たのであらう。

愛情と宗教には理想的解決をなす力がある。母は其子を驚くべき者と見る。情
人は意中の乙女を神聖なるものと見る。耶穌は愛の神を意識することによりて人
間美を見られた。昔の神々は壓制的超人で、實は人君と征服者を神祕的に現はし

たのがそれである。耶穌の神は大なる父にして、正しき者にも正しからぬ者にも
日光を照らし、萬人を赦して之れを愛する神である。耶穌は實に斯かる信仰の靈
的環境の裡に生活し、此見地から萬人を見給ふたのである。彼にありては人々は
神の子等であつた。最も賤しき者でも尊ぶべきものであつた。神の御顔から彼を
照した光明は殺風景な人間をして光彩あるものとなした。斯くの如くにして宗教
は社會的情感を増し加へ且之れを美化する。

耶穌は自ら感得せる人生の神聖觀を幾分其弟子達に傳へることが出來た。ザン
トは「斯かる高尚な意味に於ける人生は基督教によりて世に現はれた」と云つた。
人に對する愛情は教會の社會的教義となつた。これ以外の耶穌の確信にして基督
教界の一般思想を涵養したのもあるけれども、教會は何時も人の心靈の偉大性
に對して淺からぬ尊敬を拂つて居つた。人は神の姿にて造られ、神の神聖と永生
とを受くべき者なりとはその常に唱導する所であつた。

社會的行動はこれから如何なる影響を受けたか。教會は從來殘忍刻薄を事とした所の世上の幾多の暴力や状態に對して大に反抗せしや。

宗教思想が歴史的に如何なる影響を與へたかを明かに知ることは至難のことである。これは靈妙にして容易に理解し難きものである。しかし福音宣傳や外國傳道を觀察すれば適當な判斷が出来る。基督教に歸依した經驗を有する人は必らずや人に對して從來になき新しき情愛と親密とを加へ、又一層高き見地を以て之れを見るに至つたことを記憶するであらう。これは基督教的評價を以て人生を見ないのである。外國傳道にありては基督教の勢力と基督教的ならざる社會生活との差違は容易に之れを見ることが出来る、異教社會の無情殘忍に比して著しく生命と人格とを尊ぶに至りしことを知るに難くない。近代の歐洲が昔時及び東洋と異なる

重なる點の一つはこゝにある。眞に基督の精神を體驗した者は常に人生を愛し、其零碎の廢物殘骸をも輕んずることをなさぬ。此人生の神聖と云ふ思想こそ實に基督者男女の行ふ慈善事業となり傳道事業となるのである。

人生に對する情愛の念は社會運動の一大原動力である。これまで基督教の勢力圏外に於て、果して永續的にして効果ある社會改善運動が斯くまで普く行はれたことはあつたらうか。十六世紀以後の基督教的廓清運動と民主思想の勃興との間には何等かの因果的關係は無つたらうか。基督教思想と感情の傳播は兼ねて有力階級の讓歩を將來することなかつたらうか。英國の勞働者間を動かしたるウエスレー一派の信仰復興は勞働同盟運動、下級教育、民主思想の涵養の發展に如何なる貢獻を試みたであらうか。種々なる社會階級に普く影響を及ぼすには長日月に涉りて偉大なる確信を持たねばならぬが、しかし又屢々俄かに功を收むることもある。一般人間の價值と能力とに對する信念が民主制度の精神的柱石となること

は今更ら疑ふべからざることで、教會が振つて人間の價値と神聖を保證する基督教思想を傳ふることに於て、市民の自由を守る大安定機となつたものは實に教會である。

耶穌は凡ての人の感ずる所のことをば宗教的權能を以て宣言された。時には社會の人爲的差別を打破し、生命は生命其物として價値あることを實現するためには嚴肅なる死の前に立たねばならぬこともある。しかし人間本來の眞率に歸へればわれらは人生の神聖を感ずる。

三

現代の社會組織は此情感の發展を助成するか或は之れを妨害するか。それは兩方面に働く。基督の精神を傳へんと欲する者は、現代の社會制度が如何なる點に於て生命を輕んじ人格の價値を減ずるかを研究する必要がある。

久しき因襲となつた階級的差別は上流社會に名譽を與へて他の階級から之を分離し、從つて自然に下級者を却け人類の同一血族たる關係を疎隔して仕舞ふ。或國々にありては下流社會の自尊心を全然認めず、最も氣の毒なる刑罰を加へて之を蹂躪することすら行はれて居る。奴隸制度は種々なる形式の下に僕婢農民を抑へつけて居る。差別的階級制度の最も明かに現はれるのは男女關係に於てである。愛情は有力なる平等實行家である、それ故に階級的誇りを破壊する。劇曲や小説の筋は何時も愛情が社會階級の法則を破らんと試みる所に波瀾を起すものである。階級的精神の牢として抜く可らざる所において、男子は同階級の婦人と下級の婦人とに對して別種の道德律を作る。紳士が下級の婦人と結婚するのは之れを辱むる以上の罪惡と看做されて居る。

法律上階級の差別を認めないことは米國の誇りである。新大陸の狀態と宗教的併びに政治的理想主義に含まれたる思想とは幸に一致した。果して此狀態が永續

するか、或は貧富の差異はやがて階級的區別を劃し階級的傲慢を産出するであらうか。「良家」と云ふことは果して何を意味するか。學校生活は階級の存在を是認するや否や。移民問題は人種、宗教、言語、習慣の差異を加ふることによりて社會的分裂を増すの恐れなきか。米國に於ける移民歴史は米國人が外來者の生命に對する評價に關して如何なる事實を提呈するや。

寡頭政治は何時も民衆の無能にして少數者は優良なりと云ふ假定に基きて其制度を辯護する。併し其法律なるものは眼中労働者なく全然其人間の要求を輕んじて居る。此れと同じ根本思想は工業界の禍ひとなつて居る。労働者が己が働きたるある境遇を組織し又之れが統御に干與する權利を與へられざるに於ては、これ決して労働者の價值を認めたと云ふことは出來ない。數年間眞面目に働いても所有權も衡平權もなく、職業擔保の權利もないとすれば、これ決して労働者の人格を認めたと云はれない。境遇改善に對する陳情權なるものは果して人格

の價值と神聖とを主張する基督教々義を適當に示めすに十分なるべきものであるか。財産は人格の自由と發表のために必要でないか。

戦争と娼制とは此社會原理に反對する極めて不面目なる罪惡である。戦争は大規模の生命濫費者である。娼制は人格を輕んずる極惡の制度である。

知的研究と科學的事業は人間の價值に對する熱情を冷却する傾向があるか。自然が惜氣なく生命を浪費する事實を見て我等は人間社會にも之れを應用すべきか。しかし耶蘇犠牲を辭せざる事實を見て我等は人間社會にも之れを應用すべきか。しかし耶蘇は無能者を排除すべきことを云はれたことは一度もない。彼は却つて之れを救ふべきことを告げ給ふた。これを實行するためには一方ならぬ建設的力量を要する。又それと同時に人間に潜在する起死回生の能力に對する高尚なる信念の必要がある。學問研鑽に従事する隔離的態度はやゝもすれば生來の利己心と結び付いて、餘り興味を惹かぬ民衆に對して冷淡なる心を産み出すであらう。此知的誘惑から

無難に遁れんためには基督の懐かれたる温情に熱せられねばならぬ。

四

茲に一つの異論がある。宗教的憐憫によりて無暗に弱者を甘やかして其數を殖やし、或は彼等をして社會に勢力を振ふに足らしむる、とは、人類の將來に對して憂慮すべきことであると云ふのである。

併し耶蘇は弱者が永く弱者として残るべきことを欲し給ふたか。彼の社會的情感、或は單に情に脆いものであつた。彼自らは剛毅雄大の氣象に富み、決して俗論や陋習に妥協するやうな人ではなかつたか。彼は當時の官憲を向ふに廻はして孤軍奮闘の手並みを示めした。今日に傳はれる貧弱な材料によるも、彼は憤怒嘲弄より温情諧謔に至るまであらゆる情感を發揮されることが分かる。他人のために自由と剛健なる精神とを得る權利を要求されたのも、畢竟するに自己の強い個人性

あるが爲めであつた。他の英雄豪傑は人々を己が目的を達する手段として用ゐた。併し耶蘇は何んな生命でも品格でも之れを蹂躪したり破壊したりするやうなことは決してなかつた。彼は開放者であり、強者の創造者であつた。其後彼を信ずる者にして人々の靈魂に新しい軛を掛けて其自由思惟を拘束し本來の面目を發揮することを妨げたものも現はれた。併し耶蘇の精神は人に覺醒を與へる力である。所謂儒者も起ち怯者も面目を改むるは彼に接して得たる感化力の結果である。

『耶蘇基督は凡ての心靈を光明に導きし最初の人にして、今や何人も其事業を打消すことは出来ぬ』(ハルナツク)。但し此宗教的信仰を受け納れて之れを生活の大方針となすのは萬人の努力に俟たねばならぬ。基督教の精神に一致し近代文明の主張に調和せんと欲するならば、我等は宜しく無味乾燥にしてしかも不快なる外形を取り除きて、其中に潜める人の神性を全ふする愛情、忠誠、犠牲、向上、悔改等の諸性質を看取する丈の覺悟がなければならぬ。カントが我等は須らく

人を手段として取扱ふことなく常に之れを一個の目的物として取扱はねばならぬと云つたのは、彼的人格尊重の意見を述べたのである。現代の文明が人間を以て單に少數者のために富貴を産出する勞働機に過ぎずとなすのは、決して基督教的所業とは云はれない。何人にも斯かる精神を以て他人を遇する者は自己の高貴なる性能を破る者である。フキヒテの曰ふ如く、人を奴隷視すれば自らも奴隷となるのである。我等はこれに加へて云はん、人を神の子として遇すれば自らも神の子となり且つ神を知るに至らんと。

『人格尊重の主義は倫理と宗教の原理である。故に此主義は個人生活にありても文明社會にありても最も確實にして最も高き批判者である。冥々の間にも凡ての人間の進歩の一大指導力となり原動力となつたのも此主義である。又之れを宗教的に解すれば、人生の意義と價值とを決定する信念は實に此主義に外ならぬ』(キング)。

設問

一、普通の人間評價

- 一、實用に適應せざる人を重んずべき程度如何。
- 二、平常人を評價する根底となるものは何ぞ。

二、耶蘇の人間評價

- 一、以上の日課にありて最も鮮明に耶蘇の情感を示めすものは孰れなりや。
 - 二、耶蘇の宗教的洞察は其社會的情感を深からしむることとなりしや。
 - 三、我等は耶蘇の如き神の意識なくして果して彼の人間觀を懷き得るや。
- 三、近代生活に於ける個人の評價
- 一、近代社會が人間を評價するに當りて經濟的利害と關係なきや否や、其實例を擧げて之れを證せよ。

二、近代生活は個人の價値を高低いづれに評價する傾向ありや、これに對する基督教の感化の程度如何。

三、産業界の事變の統計は人生の基督教的評價と一致するや。

四 歴史の回顧

一、基督教の勢力を受けざる場所において社會的公正の運動に普くして完全なるものありしや。

二、近代の外國傳道は此章に論じたる問題に對して如何なる實驗となるや。

三、英國にありてウエスレー一派の信仰復興と産業同盟との間に如何なる關係ありや。

五、特別討議

一、階級の永續的差異は下流社會に對する同情心の乏しきより生ずるものなりや。

二、己が都市に於ける階級の差別を擧げよ。

三、學校入學に際して斯様の差別を感ぜざりしや。

四、學校生活は人を冷酷ならしむるや或は同情心を加へるや。

五、社會殖民地に於ける生活は學校在學生に對する尊敬を増すに至りしや或は減ずることとなりしや。

六、若し自ら卑しむべき境遇にある労働者なりしならば如何にして自重の精神を維持するや。

七、優待法は自重の精神を養ふや。

八、科學的研究、特に進化説は民衆に對する尊敬を加へしや。

九、宗教は人の人格を強くするや或は弱くするや。

第二章 人類の團結

人間相互の聯關

人には何人でも人間としての價値と神聖とがある。これが最も單純にして最も根本的なる原理として耶蘇の信ぜし所のものであることは前述の通りである。次に人は相互に如何なる關係ありやと云ふことを研究せねばならぬ。

日 課

第一日 基督の社會的情感と律法

その中なる一人の教師イエスを試みん爲に問ひて曰けるは、師よ、律法のうち何の誠が大なる。イエス答へけるは汝心を盡し、意を盡し、主なる汝の神を愛すべし。これ第一にして大なる誠なり。第二も亦これに同じ己の如く汝の隣を愛すべし。凡ての律法と豫言者は此二の誠に因れり。

——マタイ二十二、三五—四〇

猶太の律法の煩瑣なる舊慣古俗の中にありて、最も大切なるものは何であるか。これは宗教戒律學者には重大なる研究問題であつた。耶蘇は一切の儀式禮典を捨て、愛情こそは宗教にありても倫理にありても、人生の金科玉條となるべきものなりと主張せられた。これは徹底的に宗教を單純化し靈化したものであつた。加之愛こそは人と人とを結合して互に相依らしむる所の社會的本能である。何人にも愛を要求する者は團結を要求する。愛を第一義となす者は友情を重んずる。

耶蘇が愛を唱へた時には、單なる感情以上の如何なるものを意味されたか。

愛は眞に最高のものであるか。

アウガステンの警句「愛して汝の欲するが儘に振舞へ」と云ふことを如何に解すべきか。

第二日 耶蘇友情を求む

其時イエス彼等と共にゲツセマネといふ處に至りて、弟子等に曰ひけるは汝等こゝにをれ、われ彼

第二章 人類の團結 (第一日)

處に行きて祈らん。ペテロ及びセベダイの二人の子を携へ、憂へ哀みを催はし、彼等に云ひけるは、わが心いたく憂へて死ぬばかりなり。こゝに待ちて我と共に目を醒ましなれ。少し進みゆきてひれふし祈りいひけるは、わが父よ、もしかならば此杯を我より離し給へ、されどわが心のままをなさんとするにあらず、聖旨に任せ給へ。而して弟子に來り、其寢れたるを見て、ペテロに曰ひけるは、かく一時もわれと共に目を醒しなれ。能はざるか。惑ひに入らぬやう目を醒しなれ。能はざるか。惑ひに入らぬやう目を醒まし、且つ祈れ、その靈には願ふなれど肉體よわきなり。再びゆきてまた祈り云ひけるは、わが父よ、もしわれに此杯を飲まざれば離つこと能はずば聖旨に任せ給へ。來りて又彼等の寢たるを見る。これ彼等の目疲れたるなり。彼等離れて又行き、三度めも同じ言をもて祈れり。遂に其弟子に來りて曰ひけるは、今は寢れて休め、時は近し人の子罪人の手に付されん、起きよ、我等行くべし、われを賣す者近きたり。—マタイ二十六、三六—四六。

耶蘇は個人としては至つて交際好きで、彼が人々と交はることを深く喜ばれたことは明かである。彼は社會の交際歡語を喜び、友情を重ぜられた。かくて一團の男女は彼に集まり來りて、専ら忠誠を致した。ペテロの否定を悲み、ユダの變節を痛まれた所以も、或程度までは彼等が交際の友であつたからである。ゲツセマネに於て彼は衷心友情を切望せられ、神に祈つたと同時に、又ペテロとヨハネに近づき給ふた。友情の渴仰と孤獨の不安を感ずることは眞に人間的にして社會的なる性質を有することの證據である。

他人を必要とすることは如何なる程度に於て力の標示となり、又弱點の標示となるか。
團體精神或は階級精神は基督教的の愛の律法に如何なる關係あるか。

第三日 情誼の回復

其時ペテロイエスに來りて曰ひけるは主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯すを赦すべきか七次まで乎。イエス彼に曰ひけるは汝に七次とは言はじ七次を七十倍せよ。—マタイ十八、二一—二二。

愛は人を結合し、憎悪と憤怒はこれを分離して友情を破壊する。それ故に基督

教的精神に於て特に盡力すべきことは、人が惡意のために離叛して居つた時は何時にても、之れを再び元の友情に回復せしむることである。これは告白と赦免によつて出来る。耶蘇が赦免を重んじたのは、即ち社會の團結を重んぜられたからである。主の祈りにありては、人と完全なる交情を結ぶことを以て、神と完全なる交情を結ぶ一條件となし、われらに負債ある者をわれら赦せば、『われらの負債をも赦し給へ』と云つて居る。

赦免の達し得ざる個人的損害ありや。
 人を赦し或は人に赦されたる顯著なる經驗ありや 其經驗は自分に對して如何なる宗教的・道德的影響ありしや。

第四日 基督教に於ける愛の高調

主は我等の爲めに生を捐てたまへり。是れに由りて愛さふ事を知りたり。我等また兄弟の爲めに生を捐つべし。世の資財をもち兄弟の窮乏を見て反て惠施の心を閉づる者は何で神を愛するの愛その

衷にあらんや。小子よ我等愛するに言さ舌を以て相愛する事なく行さ實を以てすべし。—ヨハネ第一三、一六一—一八。

愛する者よ我等互に相愛すべし。愛は神より出づれば也。おほよそ愛ある者は神に由りて生れ且神を識るなり。愛なき者は神を識ず神は即ち愛なれば也。神はその生給へる獨子を世に遣はし我等をして彼に由りて生を得しむ是に於て神の愛われらに顯れたり。—ヨハネ第一、四、七—九。

愛する者よ此の如く神われを愛し給へば我等も亦たがひに相愛すべし。未だ神を見し者なし我等も互に相愛せば神われらの衷に居りて、彼を愛する愛を我等の衷に完全す。—ヨハネ第四、一一—一二

以上の聖句は初代基督教徒の文書の一である。これによりて、新宗教は愛を以て其教義の最も重大なるものと見做したことが分かる。斯くして人の愛情と云ふ自然の社會的本能が宗教的動機と力によりて著しく強められ又高められた。其動機の中にありて、基督の人格と生涯に發したるものは如何なるものなるか。

基督教以外の文學に、斯くまで愛を高調したるものありや否やあらば之れを證すべき引用句を擧げよ。

第五日 一致協同の責任

其時イエス多くの異能をなしたまひたるに諸邑の悔改めざるに由て責めいひけるはあゝ禍なる哉。ラジンよ、噫禍なる哉。ペテサイダよ、汝等の中になしし異能を若シロミシドンになししならば彼等は早く麻をき灰を蒙りて悔改しなるべし。われ汝等に告げん審判の日にはシロミシドンの刑罰汝等よりも却て易からん。既に天にまで擧られしカペナウムよ、又陰府に落さるべし。蓋なんちになしし異能を若シロムに行しならば今日までも尙保存しならん。我なんちらに告げん審判の日にはシロムは汝よりも却つて易かるべし。——マタイ十一、二〇—二四。

常に共同の仕事に従事すれば、其仲間にも共同の精神と共通の活動的標準が出来、其關係者はこれによりて其行動を融和調整するものである。耶蘇はガリラヤに於て交はりたる隣人の團結の必要を感じ、これを以つて其道德上の判断には連帶の責任を有する所の人間の團體となした。

從來己れの加入せしことある團體にして其團體の善惡が己れに深き印象を與へたるものありや。現今關係あるものに就いては如何。

現代の歐洲戦争が國民的團結に就いて何を教ふるや。

第六日 縦に見た人類の情誼

噫なんちら禍なるかな偽善なる學者よ、パリサイの人よ、汝等豫言者の墓をたて義人の碑を飾れり。又いふ我等も先祖の時にあらば豫言者の血を流すことに與せざりしを。然ば汝等は豫言者を殺し者の裔なることを自ら證す。なんちら先祖の量を充せ。蛇虺の類よ、汝等いかで地獄の刑罰を免れんや。是故に我、汝等に豫言者、智者、學者を遣さん。或は之を殺し、十字架に釘け或は其會堂にて之を鞭ち、或は邑より邑へ逐苦めん。そは義なるアベルの血より殿の壇の間に汝等が殺しバラキアの子ザカリアの血に至るまで地に流したる義人の血は凡て汝等に報い來らんが爲なり。われ誠に汝等に告げん此事みな此代に報來るべし。——マタイ二十三、二九—三六。

耶蘇の見らるゝ所によれば、道德的連帶責任は、單に一所に働きつゝある同時

代の人々の間に存するのみならず、同種の仕事に従事しつつある異なる時代の人々にも存在するのである。各時代の人々は其都合のよい過罪に執着し、一層高尚なる大義を唱道する者を沈黙せしめやうと力める。後世子孫は過去の事件に對しては、至極公平なりと自認するけれども、現在の事件に對しては、依然狂暴を逞うして敢て怪しまない。子孫は新しい舞臺で昔の悲劇を再演して、其祖先と聯絡を取る。耶蘇は猶太國民の歴史を通觀して、罪惡が連綿として古今を通じて連帶的に各時代の人々を結合して居ることを認められた。

聯絡とは單に類似の行動に存するや、或は社會生活には罪惡の因果的連續ありや。

我等自己の家族的歴史、財産併びに仕事にありて我等を過去の罪惡と聯絡せしむるが如きものなきや否や。

第七日 主の祈りに現はれたる社會意識

然ば汝等かく祈るべし、天に在ます我等の父よ、願くば爾名を尊崇させ給へ御國を臨らせ給へ。御旨の天に成ごこく地にも成せ給へ我等の日用の糧を今日も與たまへ。我等に負債ある者を我等がゆるす如く我等の負債をも免し給へ。我等を試探に遇せず惡より拯出し給へ。國に權と榮は窮りなく汝の有なればなり。アーメン。——マタイ六、九—一三。

目に見えぬ神の現存を渴仰する所の人の心靈に勝りて孤獨なるものあるか。主の祈りに現はれたる意識に勝りて一層社會的なるものあるか。

此祈願にありて、社會的團結なる觀念が此祈禱の思想の當然の前提と見做したるは、如何なる個處であるか。

人類の團結が、耶蘇にありては、本能的實在にして明かなる社會原理でなかつたならば、果して斯かる祈禱を考へることが出來たであらうか。

一週間の研究

人は社會的動物なりとは凡ての社會的研究に於ける根本事實である。人を好むも好まぬも勝手なれども、若し自己に近づいて來る人あれば全然これに無頓着な譯には行かぬ。『サートル・レザルタス』に云ふ『汝これを否むも益なし、汝はわが兄弟なり。汝の憎惡、汝の怨恨、汝が氣の勝れざる時に當りてわれに告ぐる愚かなる虚言、これ凡て同情の轉倒せるものにあらずして何ぞ。われ若し一臺の蒸氣汽鐘なりしならば汝は態々われに虚言を吐くことあらんや』と。

異性に對する思慕、親の愛情、友人の情交、愛國の至情、遊戲の歡喜の如き悉く情誼の種々なる現象である。以上のものが我等に喜悅を與へるのは我等の社交的本能を満足せしむるが爲めである。一致協同を實現すれば人生の趣味が増し加へられる。情誼の埒外に孤立することは非常に苦痛である。多くの惡事が人心を惹

くのは偶々それが情誼の一端となるが故である。酒場が懐しいのは仲間と交はるからである。(『ジャック・ロンドンの『ジョン・バーレーコロン』を見よ。)

一

人類の此社交的團結を最も痛切に感じたものは耶蘇の右に出づるものはない。彼はこれを神聖なるものと見た。彼が愛情と赦免とを重んじたのもこれがためである。彼は己が人格を社交的引着力の本能的背後に置き大に之れを獎勵した。彼は其處に宗教の中心を置き何處までも之れが徹底を期した。苟も友情に反するものは悉く之れを罪惡視した。個人の生命と人格とを尊ぶ人の本性に於けると同じく、人間本來の社會的團結の場合に於ても、彼は宗教の直感によりて人間の盲目的本能を高め、其處に人生の根本原理を求めた。斯くして情誼の範圍を擴げるのが基督教の任務である。

普通人間の判斷は耶穌の試みた評價を肯定する。情誼の堅固なる形式が出来れば、其處に一種神聖なる感じが起り、人は之れを一種の神々しい神殿となして擁護する。尙一段高尚なる情誼が出来れば人はこれに對して恰も神殿に對すると等しき宗教的熱情を現はして來る。宗教的忠誠即ちこれである。

家族は團結の中にも最も堅實なものである。始めは男女兩性、經驗、趣味、要求、目的などの點から見て兩極端にある二個の單位から造られ、一たび出来れば最も神聖にして高潔なる意味を有することとなるものは即ち家族である。そして子女が加へられるれば、年齢、能力、要求の差が一層烈しくなる。しかも此矛盾せる種々なる要素の中から社交的情愛が生まれ出で、多くの場合に於て人は此情愛に絆されて人生の争闘と人事百般の有爲變轉に處して撓まず、斯くて男女を問はずこゝに最大の満足の源泉を見出し、又これに對して自然に敬意を有するに至るのである。眞の家族は家庭の設備を構へ、疾病困難に際しては相助け、同情

同感で、以て利害關係の團結を計り、協力一致の大教育を至ふるのである。

政治的團結の起原は家族的團結の廓大したのである。一國民が其國家と自由とを擁護せんとする熱情は、決して單に不動産と生物とを保護するのではなく、實に國民の同胞的關係と團結力とを保護することである。祖國のために艱難を排し生命を捧げることが辭しなかつた熱情に於て特に注意すべきことは、これまでの國家は凡て狂暴を事とし掠奪を競ひし事實のみ多くして、眞に友情的行動の寧ろ稀であつたのである。これまでの愛國心と稱したものは未だ實現せられざる大情誼に對する一種の豫言的希望であつた。蓋し國人は信仰によりて歩むものである。社會的團結の一種神聖なる意味の存することを證するものありや。數年間の學生生活の經驗が將來永く人生一代の快事として追憶さるゝは果して如何なる理由であるか。學生が純無慾の精神を以てチームや友團のために奔走するは何の爲めであるか。これは果して自分のための利益を當てにしてゐるためであるか、或は團

隊の一員となりて人生の美を發揮しつゝありと感ずるがためであるか。種々なる學校團體に伴ふ危険は友情の神聖なることを證するや或は寧ろ其反對なることを示めす。

歴史上にありて、人が其仲間と困苦生死を共にしたことは稱讚すべきこととして記憶されて居る。これに反して離叛裏切りは不面目なこととして目されて居る。自分の安全や利慾のために團結を破る者は決して赦されない。

保險と協同とは團結力の二大證明者である。保險にありては相互の重荷を背負ひ、これによりて基督の律法に適ふことをする。協同團體は歐洲諸國にありて偉大なる成功を示めしたが、これは先づ隣人觀或は共通の理想的信念が社會團結の既定意識となつて居る時に於てのみ成功するものである。斯かる團體が成功するには多大なる困難と戦はねばならぬ。これが一たび成功すれば國人の經濟的繁榮と道德的確立及び進歩を促す影響は大に見るべきものがあるであらう。

二

上述の如くに友情は神聖なりと云ふ耶穌の社會訓は人の本能的に是認する所のものである。基督教の大律法は人の社會性に矛盾せずして、却つて之れを明かにし且強めて居る。それ故に社會團結を計り其福祉を擴むることは基督教徒の特別な使命である。聰明に之れを成就せんとすれば先づ現今の團結力が阻害されて居る所は何處なるかを注意せねばならぬ。

例へば社會的團結が商業界に於て否定されて居ることを知るのは大切である。競争はどうしても友情に伴はぬものであるか。社會政策は必らず情誼的のものであるか。消費者から獨占的利潤を收め、或は購買者の無智と需要に附け込むことは情誼を拒絶したのであるか。市場法は社會的情誼と兩立すべきものであるか。

産業界に於て事實上團結の主義を實行して居る所があるか。傭主と傭人との間に協同忠順の眞精神を示めす所があるか。感情は斯かる場合に於て増進し、傭主と傭人との間の經濟的關係に多少見るに足べき結果を示めして居るか。何故に兩者間の反感を見ると多いか。これは賃銀制度の避くべからざる結果であるか。組織的勢力が特に同盟罷工の如き場合にありて好んで團結する事實を何と解すべきか、又同盟罷工に加はらざる者に對する惡感は何問題と如何なる關係あるか。

戦争は大規模に於て情誼を破つたものである。一九一四年以來の大戦争は愛の缺乏を極めて廣大に表示したものである。一國民が他の一國民に對して何等社會的團結を認めなくなれば、凡ての道德は茲に敗れ、憎惡と無情と欺偽の洪水が起る。國際平和の問題は愛情と社會的團結と範圍を擴張する問題である。斯かる道德的愚昧と無氣力の爲めに罰せらるゝまでは、眞面目に此問題を考へる者の至つて尠かつたことは確かに基督教國の罪惡である。現代の青年男女は宜しく此問題を智慧と良心とに訴へて畢生の研究題目となし、徹底するまでは中止すべきものでない。

三

宗教は社會的團結を助成するや、はた之れを無効にするか。歴史上に於て、宗教の力は果して人類の分離を來したか、或は團結を生みしか。

宗教が以上兩方面の働きをなすことは明かであるから、宗教に心を寄する者は其宗教が制裁を脱して友誼を破るが如きことなきやう注意せねばならぬ。普通に宗教生活の花と目せらるゝ所の神秘的祈禱や默想でも、人をして同胞に對して冷淡ならしむることがある。

耶蘇の祈禱の經驗が遁世的でも非社會的でもなかつたことは注意すべきことである。彼は活動の準備として祈禱を行ひ給ふた。受洗後獨り荒野に退いたのは、

メシヤの使命を成就すべき原理を決定する爲めであつた。彼の試練がこれを證する。味爽早く祈らんとてカペナウンに行つたのは、ガリラヤの村落に向つて進撃的傳道運動を試みんが爲めであつた。祈禱は情的放縱に過ぎぬことがある。祈禱が基督教的であるのは、單に我等の同胞のことをば一層鋭敏に且親密に感ぜしむる時のみである。

愛を讚美すること、之を實行することとは異つて居る。よしや社會に關して種々なる理論を講ずるも、自分では全くこれに反對せる利己的單位たることがある。社會的團結は偉業である。同胞を愛する心は時に偏狹なることがあつても畢生の榮譽である。然らばこれを喚起育成する方法は如何にすべきか。これは教育上至つて緊要なる問題の一つである。これは宗教的感化なしに解決せらるべきものであるか。愛情は決して命令通りに動くものではない。我等は或人々が基督に師事することによりて稀れなる愛情の力を發揮し、社會的同情を喚起し、平和の

精神を増進し、其他種々なる社交的能力を大成することを知つて居る。これを我等自身の經驗に徴して、耶穌に親しく接することによつて、著しく友誼的精神を加へ、又高貴なる社會的團結に對する性能を發揮し得たことを自覺するやうにせねばならぬ。蓋し宗教は我等をして善良なる友ならしむる。

四

支那人や南阿のゾール人と同じ地上に棲息する兄弟なりと認むる人は——他のとは同一なりと假定して——單に白人種間のみに對して人類同胞感を懷く人よりも大きな精神を持つて居る。人類の意識の發展は恰も一國家に對する意識の徐々に進歩せる如くに行はるべきものである。斯かる意識を有する人は時代の先覺者にして將來の開拓者である。宣教師は人類の團結に對して一層廣き觀念を養ふべき位置にある。彼は遠國の人々の隣人となりて、人類に對する彼等と自分の思

想を擴め、且新しき友人をば舊知に紹介する人となることが出来る。外國傳道に對する興味は事實上樞要なる教育力であつて、やゝもすれば狭き地平線内に地方的となり勝ちなる數千の平凡なる人心と家庭に、世界的團結の意識を傳播するものである。

世界大の文明の精神的根柢となるべきものは共通せる一神教の信仰でなければならぬ。斯かる信仰は統一的に決して分離的でない。世界に必要なものは團結の強き精神を有する宗教である。

設問

一、人間の團結

一、情誼と團體行動は本能的のものなりや、或は修養を必要とするものなりや。

二、憎惡の徴候は社會的團結の證明となるか反證となるか。

三、社會的團結の強き觀念は堅實なる個人主義を奉ずることを困難ならしむるか。

二、基督教と團結

一、耶蘇が情誼を渴望し給ひし例を擧げよ。

二、耶蘇の教訓にありて愛情の位置は團結と如何なる關係ありや。赦免の義務はこれに如何なる關係ありや。

三、主の祈りの精神は基督教の團結心の位置を如何に定むるや。

三、耶蘇と種々なる社會團體

一、耶蘇は如何なる場合に於て團體を以て集合個性と見做されしや。現今都市を以て道德的單位の責任あるものと見做すは正當なりや。

二、耶蘇は時代と時代の間の道德的團結を如何に認められしや。

四、現代生活の團結

- 一、現代生活に於て團結の精神が容認せらるゝ所と排斥さるゝ所とありや。
- 二、戦争が如何にして耶穌の社會團結の精神を蹂躪するや。戦争は情誼と團結とを増進することありや。ありとせば如何なる場合なりや。
- 三、階級的意識は社會的團結を排斥するものなりや、或は之れを助勢するものなりや。團體的忠誠をして一般福祉を助くる道は如何。
- 四、組織的勞力が特に同盟罷工の如き時に於て好んで協力することを如何に考ふべきや。同盟罷工に加はらざる者に對する憎惡の念は社會的團結の方面より如何に解すべきものなりや。
- 五、何故に傭主と傭人との間の確執は頻繁なりや。これは賃銀制度の避く可らざる結果なりや。協力の眞意を全うする方法は如何。
- 六、製造者が賣買特許權を有する時、基督教的教訓を遵守せんとせば、果して

如何なる程度まで其利益を認むべきものなりや。

七、競争の非情誼なる場合は何時なりや。社會主義は情誼を保するや。

五、團結を強むること

- 一、愛の法則を以て現代生活の根抵となす方法は如何。
- 二、宗教は社會的團結を助くるや、或は之れを損ふや。
- 三、基督教に現はれたる愛の法則は米國に於ける種々なる人種間の關係を如何に見るか。
- 四、基督教外國傳道團は社會を國家的關係より國際的併びに人種間的關係に進むるが爲めに如何なる貢獻をなせしや。
- 五、世界的社會團結は基督教の感化なしに成功し得るや。

六、特別討議

- 一、現代の商業及び工業組織は何如なる程度まで團結の經驗併びに其教育の基

礎となり得べきか。

二、現今の廣告に於て如何なる方面が基督教的にして如何なる方面が非基督教的なるや。

三、市場法は如何なる程度まで情誼的社會觀と調和するや。

四、成功せる社會主義の團體は團結力を一層強くするや、或は新たに分離的利害を生ずるや。

五、大學と勞働組合と孰れが忠誠を促進せしむる力ありや。孰れが多く忠誠を示すや。

六、競技團體の精神が學生間に不幸なる結果を生ずるは如何なる場合なりや。

第三章 民衆擁護

強者は弱者を助く

以上、生命と人格との神聖なることと、人類の精神的團結と云ふ二個條は、耶蘇の根本信念となつた社會公理である。今斯かる信念を懐ける人が、社會の現状を見て、いかにも生命を輕んじ、社會的責任を重ぜざる有様を思ふ時に、果して如何なる態度を採るか。強者と自分とは如何なる義務に服すべきか。

日 課

第一日 耶蘇の社會的舞臺

その育ちし所なるナザレに來りいつもの如く安息日に會堂に入りて聖書を讀まんとして立ちければ、豫言者イザヤの書を與へしにイエス其書をひらきてかく録されたる所を見出せり。主の靈わ

れに在す、故に貧者に福音を宣へ傳へん事を我に膏を沃きて任じ、心の傷める者を醫やし、又囚人に釋さん事と醫者に見させん事を示し、又壓制へらるる者を縱ち、主の禧年を宣へ播めんが爲に我を遣せり。イエス書を捲きその役者に予へて坐しければ、會堂に在る者みな目を注ぎて視なせり。イエス彼等に曰けるは此録されたる事は今日なんぢらの前に應へり。衆かかれ稱讚めその口より出づる所の恩惠の言を奇しみ曰けるは此はヨセフの子に非ずや。——ルカ四、一六一—二二。

ルカが耶穌の公けの事業に入らんとする首途に當りて、其故郷の會堂に出席した事に、特別の意義を見出した事はさもあるべきことである。イザヤ（六十一章一節以下）の章句は耶穌の好んで引用された所のものであつた。彼は此言葉の中に己が經綸の一括して示されてることを見て、直ちに之れを自分のプログラムなりと言明した。そして其約束が今や成就されんとするに至つたのである。其約束とは何であるか。貧しき者は喜びの音信を得、囚人は放免せられ、醫者は眼を開かれ、壓制さるる者は解放せられ、又「主の喜ばしき年」が來らんと云ふのである。も

しこれが暗に猶太の五十年祭（レビ記第二十五章参照）を指したものでならば、これはソロンがアゼンスに於て行つたやうな、革命的な「負擔の解放」と云ふものであつた。兎も角も以上の言葉の中には社會的併びに精神的解放が一所に含まれて居つた。耶穌が苦痛傷心の人生の重荷に惱める人々に自由豊潤の生活を與へんことを以て己が使命とせられたことは明かであつた。

「汝われを世に送りし如く、われも彼等を送れり」。耶穌の働いた舞臺は、正しく我等の舞臺にして、又我等のプログラムであるべきか。

第二日 救主の社會的努力

ヨハネの弟子すべて是等の事を彼に告げければ、ヨハネ二人の弟子を召びて言遣はしけるは、來るべき者は汝なるか、亦われら他に俟つべき乎。その二人イエスに來り曰けるはバプテスマのヨハネ我等を汝に遣はして言はしむ、來るべき者は汝なるか、亦われら他に俟つべきか。此時イエス多く

の疾ひあるひは病むよび惡鬼に憑れたる者を醫やし、且おほくの醫に見ることを賜ひたり。イエス彼等に答へ曰ひけるは汝等が見るころをヨハネに往きて告げよ夫れ醫者は見、跛者は歩み癩者は潔まり聾者はき、死にし者は復活され、貧者は福音を聞かせらる。凡そ我爲に厭かざる者は福なり。——ルカ七、一八一—二三。

耶穌は來るべき者であつたらうか。彼はヨハネの豫期には符合しなかつた。救世とは民衆の惡しき分子を拂ひ除け、麥から糠を篩に分けて、之れを焼き盡すことであつた。その手に握るべき象徴は斧鉞であつた。然るに耶穌は毫も斯かる殺伐なる態度を示めし給はなかつた。然らば彼は果して來るべき救主であつたらうか。

耶穌は他の方面に其努力を轉じた。即ち人の苦痛をゆるめ、貧しき者に福音を傳ふべきことに盡された。しかも民衆に對する同情は耶穌とヨハネとの間に共通せる堅き地盤であつたから、耶穌はヨハネが此證言を聞いて神の統御の當に黎明期に迫れることを認むるであらうと思はれた。

神の統御が我等の知識と情感とを支配せんことを證明するものは何ぞ。

第三日 社會的同情の結果としての教會

イエス 遍く都邑を廻りその會堂にて教をなし、天國の福音を宣傳へ民の中なる諸の病すべてを疾を愈せり。牧者なき羊の如く衆人なやみ又流離になりし故に之を見て憫みたまふ其さき弟子等に曰給けるは收稼は多く工人は少し故に其稼主に工人を收稼場に送らんことを願ふべし。

偕イエスその十二弟子をよび彼等に汚たる鬼を逐いだし又すべての病すべての疾ひを醫す權を賜へり。——マタイ九、三五—三八。

十二弟子を選び、これを二人宛に分ちて、各々別れて傳道に派遣されたことは、耶穌の工夫された最も重大なる組織的行爲であつた。これが結果として生れ出たものが、即ち基督教會である。偕てこれを創むるに至つた動機は何であるか。耶

蘇は社會の悲惨事を救濟することに心を用ひられて居つた。彼が社會状態を観察してどれ程心を悩まし給ふたかはこれによりても明かである。希臘語の動詞を譯して「悩み又流離になり」としたのは不完全極まる譯語で、第一の動詞は「皮をむかれ、悩まされる」と云ふことで、第二の動詞は「打ちのめされ仆される」と云ふ意味である。民衆は宛も狼に蹂躪された後の羊群のやうな有様であつた。眞の牧者を求むることが焦眉の急に迫つて居つた。そこで耶蘇は部下を以て傳道團を組織し給ふたのである。これ何のためであつたらう。蓋し教會は民衆の痛苦に對する耶蘇の同情の結果と見るべきものである。

現代の教會は如何なる程度まで、耶蘇の如くに民衆の境遇に同情し、又彼が傳道團を組織せし目的を繼承して居るか。或は今や民衆の境遇は一變して、昔時の如き窮迫を認ふるの要なきに至つたか。これは深く一考すべきことである。

第四日 民衆の味方としての耶蘇

イエスを擧げ弟子を見て曰ひけるは汝等貧者は福なり、神の國は即ち汝等の所有なればなり。汝等いま餓ゑたる者は福なり、飽くこゝを得べければなり。汝等いま哭者は福なり、笑ふこゝを得べければなり。人の子の爲めに人なんぢらに憎みまたこぼさげ言ひ、汝等の名を惡しこして棄てなば汝等福なり。其日には欣び踊れ、汝等の天に於て賞賜大なればなり。その先祖が豫言者になしたりしも是の如し。汝等富者は福なる哉、すでに安樂を受ければなり。汝等飽者は福なるかな、餓ゑんこすればなり。汝等いま笑者は福なるかな哀み哭かんこすればなり。凡ての人なんぢらを譽めなば汝等福なる哉。其先祖が偽りの預言者になししも是の如し。——ルカ六、二〇—二六。

以上ルカの傳へた祝福訓によれば、耶蘇は明かに身分の低き者の味方となり給うて居る。彼は云ふ、神と將來とは富者、飽ける者、快樂に耽ける者、萬事に人氣を顧る者の味方でない。畢竟するに、現在貧しき者、食に乏しき者、苦しき重

荷に惱める者、不評判な方面に立たねばならぬ者などが、却つて勝利を獲ると云ふ評決を下し得るのである。マタイ傳の祝福訓にありては、其用語は社會的と云はんよりは寧ろ精神的で、ルカ程に上流下流の區別が判然されて居らぬ。しかし其處にあつても、精神的恩惠の約束は心謙れる者、柔和なる者、迫害されたる者、不人望なる者の受くべきもので、將來地を繼ぎ、神の國を繼ぐべき者は斯かる人々であると註せられて居る。

耶蘇が以上の状態に反對なる社會に同情を表はし給ふたごせば、彼は宗教家として一層賢明高貴であつたらうか。

第五日 救済と民衆

此時イエス心に喜びて曰ひけるは天地の主なる父よ、此事を智者と達者さに隠して赤子に現はし給ふを謝す。父よ然りそれは是の如きは聖旨に適るなり。——ルカ十、二二。

兄弟よ召を蒙れる汝等を觀よ肉に循れる智慧あるもの多からず、能ある者おほからず。貴き者多らざるなり神は智者を愧かしめんとて世の愚なる者を選び、強者を愧かしめんとて世の弱者を選び。また神は有者を減さんて世の賤者、藐視らるるもの、即ち無きが如き者を選び給へり。これ凡ての人神の前に誇ることなからん爲なり。——コリント前一、二六—二九。

耶蘇の働き給ふた實際の功果は、淳朴の民によりて收めらるべきもので、學者に關係なきことが明かになつた。彼は此結果を見て欣喜雀躍し、神を讚美して感謝した。パウロも初代教會に於て同一の結論に達した。上流社會は門閥や教養を誇り、或は財産を氣にして逡巡した。しかし神が革新の實を擧げんとして用ひ給ふ所のものは、必ずや質實淳朴の民衆であつた。

耶蘇が下流社會に引きつけらるゝに至つたのは、果して何の理由によつたか。

第六日 民衆の一人としての耶穌

かれら橄欖山のベテパゲに至り、エルサレムに近づける時、イエス二人の弟子を遣さんとして、彼等に曰ひるは、汝等むかふの村に往け、やがて繋ぎたる驢馬の其子と偕にあるに遇はん。夫れを解きて我れに牽きたれ。若しなんぢらに何さか言ふものあらば、主の用なりと曰へさらば直ちに之れを遣はすべし、預言者の言に、視よ汝の王は柔和にして驢馬すなはち驢馬の子に乗り、なんぢに來るまじシオンの女に告げよと云へるに應せん爲めにかくなせるなり弟子ゆきてイエスの命ぜし如くなし、驢馬と其子を牽きたり、己の衣をその上に置きければイエスこれに乘れり。衆人おほくは其衣を途に布きあるひは樹枝を伐りて途に布きぬ。かつ前にゆき、後に從ふ人々呼びひけるはダビデの裔ホザナよ、主の名に託りて來る者は福なり、至上處にホザナよ。イエスエルサレムに至れるまき、都城こぞりて疎動いひけるは是誰ぞや、衆人いひけるは此はガリラヤのナザレより出でたる預言者イエスなり。——マタイ二十一、一一——。

茲に民衆的行列が始まつた。其乗る所のものは白馬銀鞍にあらずして驢馬の子であつて、僅に吟味して選んだ若い活潑な逸物であつた。前後を擁する者は音楽家や樂隊長に先たれた護衛兵でなくして、祖先傳來の歌謠を高吟し、來らんとする黄金時代の希望を歌ひつゝ後を跟いて來る百姓の一團に過ぎなかつた。途に布いたものとしては王者の歩道に布くやうな高價なる敷物でなくて、勞働者の汗ばんだ着物とガリラヤの人々が手で折り取つた樹の枝であつた。將來の王者たる彼は果して何者であつたらう。これを滑稽と見るべきか、壯觀と見るべきか。

耶穌がいよく人間社會に對して其精神的統治權を揮はれんとするならば、社會の各階級はエルサレムに於けるが如くに擧つて之れを歡迎するであらうか。

第七日 萬人の受くべき根本的試み

人の子おのれの榮光をもて諸の聖使を率ゐ來る時はその榮光の位に坐し、萬國の民をその前に集め羊を牧者の綿羊と山羊とを別つが如く彼等を別から綿羊をその右に山羊をその左に置くべし。斯て

王その右に在る者に云はん、吾父に恵まるゝ者よ、來りて創世より以來なんぢらの爲めに備へられたる國を嗣げ。蓋なんぢら我が飢ふし時われに食はせ渴きしとき我に飲ませ、旅せし時われを宿らせ、裸なりし時われに衣せ、病みしとき我をみまひ、獄に在しとき我に來ればなり。是に於て義者かれに答へて云はん。主よ何時なんぢの飢ふたるを見て食はせ、また渴きたるに飲ましや。何時主の旅したるを見て宿らせ、又裸なるに衣せしや。何時主の病みまた獄に在るを見て汝等に至りしや。王こたへて彼等に曰はん、我まここに汝等に告げん既に汝等が此兄弟の最微者の一人に行へるは即ち我に行ひしなり。遂にまた左に在る者に曰はん罰せらるべき者よ、我を離れて惡魔と其使者の爲に備へたる燄えざる火に入れよ、蓋なんぢら我が飢ふし時われに食せず、渴きしとき我に飲ませず、旅せし時われを宿らせず、裸なりし時われに衣せず病みまた獄に在りし時われを顧みざればなり。是に於て彼等また答へて曰はん、見よ、何時なんぢの飢ふ、また渴き、また旅し、また裸、また病み、また獄に在るを見て、主に事さりしか。其とき王こたへて彼等にいはん。我まここに汝等に告げん此最微者の一人に行はざるは即ち我に行はざりしなり。此等の者は窮りなき刑罰に入り、義者は窮りなき命に入るべし。

マタイ二十五、三一—四六。

「彼處(天)より來りて、生ける人と死ぬる人をさばき給はん」(アタナシウス信經)と云ふ言葉を考ふる時、門地、富貴、學識、權勢の如き地上の力は何の甲斐もない。一切の假面を剥がずしては止み給はぬ所の全智全能の審判者が、遂に其威力を發揮し給ふであらう。其時我等をさばくものは、果して如何なる法律と標準であるか。基督これに答へて宣はく「信仰箇條や教會の問題によらず。唯人間に對する愛情の有無により、社會に對する同情如何により、同胞との實際的團結の厚薄による」と。我等若し飢渴、孤獨、壓迫を眼前に視、兒童勞働、異人種排斥、長時間勞働、借地代の請求、淫賣、暴力によれる正當なる利潤の妨害、貪慾飽くなき者のために起れる生活費の暴騰などの行はるゝ所の國にありながら、恬然として之れを坐視するに於ては我等は唯滅ぶるのみである。

君と我と——右すべきか將た左すべきか。

一週間の研究

率直に福音書を読んで先づ第一に心頭に浮ぶことは、耶穌が深き情誼の念を懷かれたことで、これは單に苦める者惱める者に對してのみならず、下層社會にありて貧しき生活を營める百姓、漁夫、職工の如き人々に對して一様に持つて居られたと云ふことである。此階級に喜びの音信を傳へることが己が使命であるとは彼の親しく宣言された所であつて、これは單に喜ばしい言葉に止まらずして、幸なる事實であつたのである。神の統治を待望するのは埋もれたる者や虐げらるゝ者に對して或る實際的の救助と解決とを現すことであるのは明かである。今日我等の感情は特に耶穌の此方面に於ける事業に至大なる興味を起すやうになつた。藝術と文學は此方面から彼を見ることを好むで居る。

彼の貧民に對する同情は前二章に於て論じた二つの根本的信念の齎らす必然の結果であつた。卑賤にして生の疲れに惱める人々の生命の神聖を認め、且つ貧しき者の悲みをおのが悲みとなす程までに全人類の家族的團結を感せられた以上は「牧者なき羊の如くに『皮をむかれ仆される』人々を見て晏然として居ることは出来なかつた。如何なる團體にでも眞の團結心が出来れば、必らず其同情ある注意は最も苦める人々に注がれるものである。『健全なる者は醫者の助けを求めず』とは耶穌の告ぐる所であつて、強者は自ら守ることが出来る。

そこで耶穌は進んで民衆と運命を共にせられた。彼は彼等と寢食を共にし、乏しさを頷ち病氣を癒やしてやつた。彼はこれに信仰を與へ、幸福な時代の希望を與へ、又神がその味方なりとの信念を與へた。斯かる信仰の貴さは飲食物の比で

ない。彼等も亦彼の近くに集まり來りて心ゆく許りの満足を得やうとした。『人々は喜んで彼の言葉を聞いた。』

加ふるに耶穌の『貧しき者』に對する情は我等が肉體的や精神的の不具者に對して感ずる如き憐憫ではなく、愛と信頼との情であつた。ペテロやヨハネを出したガリラヤの民衆は決して貧民窟の賤民や人間の滓ではなかつた。彼等は奮勵努力の人々で、何時も社會の一般民衆の中堅となるものであつた。彼等に弱點があつたことは耶穌の諒解する所であつた。併し彼は未だ嘗つて彼等を罵り、或は『蝮の子孫よ』と叫ぶとはなかつた。彼は彼等の特殊の過失のために神國建設を破るが如きことありとは考へなかつた。彼等の要する所は精神的刺戟と指導とであつたが、其性質穩健にして、優に彼の計畫せる救はるべき人類の素質を備へて居つた。

二

耶穌の『貧しき者』に對する態度に於て認むべき尙一つの性質がある。即ち彼は之れを『富める者』に對照した。人間社會の變遷の中において常に現はるゝのは此二種の團衆である。一は己が生産的勞働によりて生活し、一は其統御しつゝある人々の生産的勞働によりて生活する。實際之れを截然區別することは出來ないが、相當の距離から之れを見れば見分けることが出来る。希臘羅馬の社會に於て、中古時代、又現代の文明諸國民に於て（自國民は別として）兩者の相對立せることを容易に見ることが出来る。兩者は互に相影響し、いづれも對手なしには存在し得ざるものである。兩階級共に獨特の道德的及び精神的習慣を發揮し、獨特の長所と短所を持つて居る。我等の或人は上流社會に生れ、或者は下流社會に生れ、又大學生活を送る者は多く其中間から出て來る。天性から、實際の經驗から、或は國家的觀念から、我等は兩者の孰れかに對して道德的忠誠を示めし、常に其方面から社會萬般の問題を省慮するやうになつて來る。

基督は勞働社會に加擔し、これが擁護の地位に起られた。我等は彼が片手を擧げて貧民を保護し、片手を擧げて富者を警戒して居る光景を想像せずには居られない。若し此事に就いて疑ふ所あらば、我等は宜しく當時の人々の言葉に徴するがよい。一般民衆が友として彼を迎へたことは明かである。爲政者階級も彼に對して同一の感情を懷いて居つたらうか。察する所、耶蘇が兩者間に公平でなかつたと云ふ結論を避くることは困難であらう。併し彼は正當であつたらうか。審美的意義から見て、又皮相的の道德的判斷によれば、上流社會は到る處愉快にして興味あるものである。しかし耶蘇の道德的判斷によれば、後章に十分述ぶるが如く「富める者」の精神的性情に對して一種不安にして危険なものがあり、普通民衆の性情には掬すべき望まじきものがあつた。此判斷は誤りがなかつたらうか。苟くも彼の道德的指導を仰がんと欲する人々に對して、これは至つて重大なる實際問題である。

耶蘇が民衆を擁護したと云ふ事實は文學、藝術の普く認むる所である。詩人口「エルは『比喻』なる詩に於て之れを歌ひ、耶蘇が地上に再來して『わが兄弟なる人々がわれを信ずるや否や』を見んとして居ることを敘して居る。

さらば汝は生ける人々の身體と心靈の上に

汝の王位と祭壇とを築きしや

汝は貴人をかばひ貧民を苦むる建物の

末永く續き行くことと思ふや

汝は白銀の門と黄金の門をもて

わが羊を其父の欄より遠けたり

春秋めぐる千八百年の間

われは其涙の流るゝを見たり

* * *

耶穌は轉じて職工を見れば

顔はやつれ憂に沈み

母なき乙女を顧みれば指は細く

缺乏と罪とに悶え居るを見ぬ

彼は二人を人々の中に置きしに
人々穢れんことを恐れて袂を拂ふ
之れを見て宣はく『見よこれを見よ
われをかゝる姿となせしは汝等なり』

三

基督が民衆の擁護者となるべき歴史的背景を見やうとすれば、溯つて舊約時代の豫言者に行かねばならぬ。彼等は彼の精神的先覺者であつた。彼は好んで彼の書經に親み、樂んで之れを引用した。希拉來の豫言者は一齊に民衆の肩を持ち、有力者階級の社會的過罪を咎めた。彼等は不正、壓迫、及び裁判官の腐敗を特筆大書した。しかも斯かる罪惡は賤しき者を押し倒すものにして、有力者は何時も之れを實行して恬として知らぬ振りをして居つたのである。『バシヤンの牝牛等よ、汝等此言葉を聽け、なんぢらは弱者を虐げ貧者を壓す。汝等は貧者を踐みつけ、麥のおくりものを之より取る。汝等は義き者を虐げ賄賂を取り、門にあいて貧者を推し枉ぐ。』イスラエルは三つの罪あり、四つの罪あれば我かならず之れを罰して赦さじ、即ち彼等は義しき者を金のために賣り、貧者を鞋一足の

ために賣る。彼等は弱き者の頭に地の塵のあらんことを喘ぎ求む』(アモス書四、一、五、一―二。二、六―七)。ミカは強者と狡者とが百姓に迫りて父祖の田圃を棄てさせ、母を其家から追拂はんがために借金に對する不當の利息を附し、窮迫に際して抵當權棄却を告げ、裁判前に裁判官と通じ、不幸者に對して無情冷酷を振舞ふが如き、彼等の常套手段を講じて居るを述べて居る(ミカ書二、一―二。二、九。三、一―二)。

我等は斯かる前後一貫せる人々の道德的見識を輕視することは出来ない。彼等の精神的威力は今尙基督教文明に努力して居るが、特に猶太民族が労働運動に對する貢獻の如きは著しきものである。

四

希臘人及び羅馬人の間にありては政治的及び文學的生活は全く貴族階級の壟斷する所となり、猶太に於けるが如き民衆の擁護者が相前後して現はるゝやうなことは決して見ることが出来なかつた。しかし後世人が大なる尊敬を表する所の人々の中には身貴族にして進んで民衆の擁護者となりし者もある。即ちソロン、マソリウス、及びグラツカス兄弟の如きこれである。

最近二三百年間、社會進化の大勢は耶蘇の目指した方面に向ひつゝあるやうである。宗教改革後宗教の制度は多少民主的になつた。民衆は政權に參し、これを經濟的改善のためで利用することが出来た。特に教育上の便宜は以前に比して大に面目を改めた。現代戰爭勃發前には、労働者は金力、安全、健康及び藝術的享樂の機會、乃至生活を價値あらしむる一切の權利などを獲得するに至るべき形勢が歴然として現はれて來た。今日は前途頗る暗澹として何とも斷言は出来ないけれども、我等は猶信仰によりて此大災禍でも畢竟するに專制暴虐の氣勢を殺ぎ、民衆の安寧が學問と政治の主要問題となるであらうと推察するのである。

耶蘇は民主主義が未だ勃興せざる時早くも民衆の味方であつた。彼は彼等を愛

し、其價値を悟り、其隠れたる能力を頼み、而して神國を之れに約束した。耶蘇の創めた宗教は、不純なる上流者の手に收められた時でも、民衆の向上の根底となりて容易に民主的運動に力を添へた。彼の人格と精神は民衆に味方せる人々の主腦力となつた、これ蓋し彼が民衆に左袒せることが明かなる故である。實際將來我等は一層明かに耶蘇の社會的感化を期待することが出来る。何となれば聖書の嶄新な歴史的解釋は一層明瞭に彼の民衆社會の仲間であつたことを示めすからである。

五

それ故に茲に第三の社會訓を加へねばならぬ。第一は生命と人格の神聖なること、第二は人間の團結であつたが、第三は強者は弱者の味方となりて之れを保護すべきことである。耶蘇は救主的裁判を叙するに當りて人間の要求と團結の命令に應じた人々のみを其部下と認むべきことを宣言した。彼は弟子の職を創設し、そしてこれによりて彼が兼ねて要求を訴へつゝあることを親しく感知せる民衆に仕へしめんがための教會の萌芽を作つた。

高等教育を受けつゝある男女學生はこれに如何に見るか。機會と修養から見れば我等は強者に屬する。研ぎ上げたる智識は甲冑であり劍である。我等の中には社會上の地位と多少の財産を繼承してゐる者もある。左程のものでなくともこれによりて生活上焦眉の急に嚇されずに濟むものがある。我等は自ら努力せず好機會を得たが、世に斯かる幸運に接しない多數の男女がある。我等は彼等に對して如何なる態度を採るべきや。我等は彼等のために奔走すべきか、或は彼等を勝手に抑へ得ると心得るか。我等は纔かに働か愉快に務むる丈に止めて、成るべく富貴を恣にする方法手段を講ずべきか。此場合にありては我等は自分の奢侈享樂に供せんとて彼等から掠奪することに心を専らにする程熱心には自ら働いて

彼等民衆のために盡すことが到底出来なくなつて来る。どうしても我等は常に貧者の肩を屈せしめる重荷の一部となるであらう。これは果して貴き功名心であらうか。然らば我等は勞働社會の仲間入りをなして我等の目的を果すことを計るべきか。我等の目的は一般民衆よりも重大なるべき筈である。何となれば我等は自己の修養に長き時間を費し又特別の便宜を與へられたからである。「多く與へられたる者は多く求めらるべし」。

學生にして己が受けた丈けのものだに拂ふ者は至つて尠いことを思ふ時、學生の道德問題の忽にすべからざることを痛切に感ずる。學校が國家の租税によりて支へらるゝとしても或は寄附金によるとしても、其收入の大部分は社會の勞働の所産なることは明かである。授業料の如きは纔かに經常費や、設備費の一小部分を拂ふに過ぎぬ。假令學生が一切の負擔を支拂つても依然として或程度までは公衆に保護される者である。我等を擁護する者は勞働者である。彼等は屢々自ら教

育を受けんことを熱望しつゝも、これが恩典を受け得ざる人々である。彼等の中にはせめて我等が飽滿の殘物や放棄したような智識の餘り屑を與へられ、大に満足する者もある。彼等の力によりて教育せられ、そして依然として彼等に賴りて衣食せんと企つることは、異教徒すらも敢へて潔しとせざる所である。況んや基督教的感化によりて作られたる社會的義務の見解から見てこれは到底許すべからざることである。

これは高等教育社會に對しては體育上の競技や、智識上の試めし以上に眞剣なる試めしである。我等は果して生きさんがために働いて居る民衆に對する社會的責任を感じ、彼等の社會的救済を全うせんとして我等の與へられたる特權と才幹とを用ひんと欲するや。

恵みの神よ、汝は何時民衆を救はんとなし給ふる。王者と貴族にあらず國民な

り。實位と王冠にあらず人なり。あゝ神よ、彼等こそは汝の心の花なり。彼等をして雑草の如く消え去らしむる勿れ。日の照さぬ所に凋ましむる勿れ。神希くば民衆を救はんことを。——エベネザ・エリオット。

設問

一、耶蘇の仲間

- 一、耶蘇は眞に貧者の味方となりしや。之れを證明せよ。
 - 二、これと反對なる方面を證明し得るや。
 - 三、これを證明するため、耶蘇の片言隻句にこれを求むると其生涯と教訓全體の印象に求むると、孰れが確實なりや。
 - 四、耶蘇の態度に關して如何なる結論を得るや。
- 二、教會と民衆

一、耶蘇が十二使徒を組織して之れを派遣せる動機を問ふ。此行動の歴史的意義を示せ。

二、教會が勞働者の特色を失ふに至りし時期と次第を問ふ。

三、今日の教會は耶蘇の民衆に對せる感情を有するや。これに對して賛否兩様の證據を示せ。

四、貧民に對する教會の社會的本分を告げよ。

三、現今民衆の擁護

一、民衆に對する同情如何によりて人を評價することは皮相なる試みなりや或は意味あることなりや。

二、今日民衆の味方となるとは何を意味するか。これが慈善及び救濟事業と異なる理由を問ふ。

三、民衆の味方として現今最も賢明にして成功せる人々を擧げよ。

四、社會改良家の弊を問ふ。

四、高等教育を受くる男女學生の問題

一、彼等は如何にして其特權に對する相當の報償を濟まし得るや。

二、現今大學生活の如何なる運動が耶蘇の此社會的教訓に一致するや。

三、露西亞、獨逸、英國等の大學生は社會運動に對して如何なる役目を果せしや。

米國學生は勞働階級問題に對してこれと等しき興味を持ちしことありや。なしとすれば其理由を問ふ。

五、特別討議

一、基督教が勞働階級より起りしことは利益なりしや不利益なりしや。それが倫理的見解及び動機に對する結果如何。

二、古代社會の刷新が下層民より發せし理由を問ふ。これは今日も行はるべき

ものなりや。

三、生産的勞働を行はずして生活することは倫理的なりや。他人の過度の働より得たる過度の閑暇を恣にするは道德上許し得べきものなりや。

四、今日の教會には此點に關する定見ありや。

五、或人が勞働階級より出でしと云ふ事實は將來彼が之れに同情する保證となるや。

六、生れながらにして民主的感情を有する如く思はるゝものは上流社會の男と女といづれなりや。

第二篇 耶蘇の社會的理想

第四章 神の國と其價值

正しき社會組織は各人に對する最高善なり

以上最初の三章に於て研究したことは單純なる人間の原理であつて、萬人に共通し且つ本能的のものである。耶蘇は單に此本能の適用の範圍を擴張し、これに對する我等の理解を明かにし、進んでこれを宗教的義務の中心となして、茲に大なる社會的及び宗教的原理の高級標準を示されたのである。

次の三章に於て論ずることは、未だ必らずしも人類一般に行はれてない觀念であるけれども、耶蘇が猶太民族の歴史的事蹟より獲來つた所のものである。即ち我等の研究問題は「神國」である。これは寧ろ「神の統治」と譯した方が一層適

切であつたらう。此觀念は實に史上數少き獨創的なる國民の一に擧げられたる猶太の賢哲の心魂に宿りて、其社會的理想並びに目的となつたものである。

耶蘇は此祖先傳來の社會的理想を如何やうに解せられたか。彼は神の國が何物を人々に提供すると思惟せられしや。神の國は人々に何を要求するか。此社會的理想は直接如何なる倫理的義務を含むか。次の三章に於て研究せんとする所のことは、即ちこれらの諸問題である。

日 課

第一日 好機會

また天國は畑に藏めたる寶の如し。人みいださば之を秘くし喜び歸へり其所有を盡く賣りてその畑を買なり。また天國は好き眞珠を求めんとする商人の如し。一の値たかき眞珠を見出さば、其所有を盡く賣りて之を買ふなり。——マタイ十三、四四—四六。

往昔戦時にありて、財産の保證なく、安全なる貯蓄所の尠きには、人々は危険と見れば、寶を地中に埋め、死ぬるまで忘れて仕舞つて居るのが、常に見る所の現象であつた。偶々之れを發見する人あらば急いで其土地を買収して、寶を占有するのである。時には幸運にも稀有の寶石を見當てることもあつた。當時の小資本家は、他の所有物を賣拂つて、其金額をこれに投ずる丈の智慧があつた。耶蘇はこれと同一なる方法を一段高尚なる方面に適用すべきことを命じ給ふた。神の國は一切のもの、中の最高善である。然らば何故に此機縁を獲んがために、萬事を堵してかゝらないか。此比譬は彼自身の經驗から作られたのである。彼は現世に神の統治を實現せしめんとて、家庭、慰藉、世評、乃至生命其物をも捨てる覺悟をなされた。

若し耶蘇が、其宗教上の理想を放棄し、富貴と官職を得て、老齡に至りて世を去つたご想像したならば、彼は果して何を待たであらうか。世はこれによりて何物を失つたであらうか。

第二日 第一義の要件

斯時よりイエス始めて道を宣へ傳へ、天國は近づけり、悔改めよと云ひたまへり。——マタイ四、一七。

神の國は第一要件である。これが第一義である。神の國が我等の現實となれば、我等は舊來の習俗を以て生活することは出来ない。我等は悔改め、遣り直ほし、人生の價値を檢査して其眞價に還算し、而して新に根本的手段を講ぜねばならぬ。個人の行爲は人間生活の意義と可能力に對する一段高き觀念に準じて高くならねばならぬ。トルストイは其回心の記事をば「我が宗教」の中に至極簡明に述べて居る。

『五年前信仰われに起る。われ耶蘇の教訓を信じ、わが全生活は忽然として茲に變ず。茲に願ひし所

のこゝ、今これを願はず、前に欲せざりし所のこゝ今はこれを欲す。嘗つて是を見しこゝは非なり、昨の非は今は是と見る。我は恰も、人が用務を帯びて出で行き、半途にして初志を離し、こゝは價値なきこゝなりとて睡をめぐらして歸り來るが如し。始め我が右の手にありしもの今は左の手にあり、又左の手にありしもの今は右の手にあり。今や家より離れ去らんこゝはせず、速かに家路に向はんこゝを願ふ。我が生活もわが願望も一轉し、善惡其位置を顛倒す。これ何故ぞ。蓋しわれら前に考へしと全く異りて、耶蘇の教訓を解するに至りたる故なり。……われ耶蘇の言葉を解し、生死は最早福にあらず。失望失せて歡喜と幸福を味ふ。』

地獄を遁れて天國に行かんために宗教を求むる人もある。或人は完全なる人格を全ふせんため、或人は神の統治を迎へんとして宗教を求むる。これら異なる精神的經驗に出でたる宗教的及び社會的意義の價値を考察せよ。

第三日 洗禮と新組織

豫言者の録して、視よ、我なんぢの面の前に我使を遣さん、彼なんぢの前に其道を設くべし、野に呼べる人の聲あり、云く主の道を備へ、其徑すぢを直くせよと有るが如く、ヨハネ野に於てバプテスマを施しし罪の救ひを得させんが爲めに、悔改のバプテスマを宣傳へたり。ユダヤの全國およびエルサ

レムの人々かれに來りて、各その罪を認はしヨルダンといふ河にてバプテスマを受く、ヨハネは驕驕の毛衣を着、腰に皮帯をつかれ、蝗蟲と野蜜を食へり。かれ宣傳けるは、我より勝れる者わが後に來らん、我は屈みて其履の紐を解くにも足らず。我は水をもて汝等にバプテスマを施し、が、彼は聖靈をもて汝等にバプテスマを施すべし。—マカ一、二一八。

ヨハネの洗禮を施した人々は死と死後の救濟とを待ち望まずして、神の國とメシヤの來臨とを待ち望んで居つた。彼等は神國の祝福に與かり、且つ來らんとするメシヤの裁判を逃れんとして、悔改めて洗禮の儀式を受領したのである。當時洗禮は新時代に進まんとする國民的併びに社會的運動の形式で、兼ねて正しき社會組織に一身を捧ぐるとの證據であつた。洗禮の斯かる本來の意味は、事實上後年の基督教的思想から失せて仕舞つた。今日苟も神の國を以て最上善と信ずる人は、自分の受領した洗禮を以て社會理想に一身を捧げ、此儀式を創めた耶蘇の指導に生涯を任せるとであると斷定すべき筈である。自ら進んで弟子の身分とな

ることを以て、斯かる社會的意義ありと見ることは、我等をして基督教の根本目的に一層切實なる關係を結ばしめることになるのである。

我等の洗禮には果して社會的意義ありや。

第四日 幸福の道

此故にわれ汝等に告げん、生命のために何を食ひ何を飲み、また身體のために、何を着んと憂慮ふこと勿れ。生命は糧より勝り身體は衣より勝れるものならずや、なんぢら天空の鳥を見よ、まくことなく、かることをせず、倉に蓄ふることなし。然るに汝等の天の父は之を養ひ給へり。汝等これより大に勝れる者ならずや、汝等のうち誰かおもひ煩ひて、其生命を寸陰も延べ得んや。また何故に衣のこさを思ひわづらふや。野の百合花は如何にしてそだつかを思へ、つこめす紡がざるなり。われ汝等に告ん、ソロモンの榮華の極みの時だにも其装ひこの花の一に如かざりき。神は今日野にありて明日爐に投げ入れらるゝ草をもかくよそはせ給へば況して汝等をや。嗚呼信仰うすき者よ。然れば何を食ひ、何を飲み、何を衣んと思ひわづらふ勿れ、これみな異邦人の求むる者なり。汝等の天の父は

凡て此等のものゝ必要なることを知りたまへり。汝等まづ神の國と其義を求めよ。さらばこれらのものは皆汝等に加へらるべし。此故に明日のこさをおもひわづらふ勿れ。明日は明日のこさを思ひわづらへ。一日の苦勞は一日にて足れり。—マタイ、二五—三四。

これは神聖なる無慾恬淡の歌である。これはかの自重心もなく遠き慮りの力もなき浮浪人の無謀大膽にあらずして、貴族的精神の無慾、何處までも人としての高潔なる威權を忘れないことを示めせるものである。神はわれらに生命を賜ふ。何ぞ生命に必要なものを與へ給はぬことあらんや。鳥と百合花とが生活を營み得るならば、況して我等をや。小事に齷齪して意氣銷沈するは、異教的にして甚だ陋劣である。

此一句の鍵は「汝等の父」と「其神國」と云ふ言葉である。人は神の子である。一とたび此自重心を得れば、紛々なる人事は毫も心を苦むことなく、何時も平靜和樂を維持することが出来る。最上善としての神國に一身を投ずれば、一切の小利

害は悉く適所に收められて仕舞ふ。神意を實現し、世に正義を行ふことを目的とするれば主要なる物質的要求を満足せしむることは容易である。神國、即ち眞正の社會組織は最高善である。他の一切の善事は凡て其中に含まれて居る。

煩ふべきか煩ふべきにあらざるか、これが問題である。我等は果して幸福に達する道として、高尚なる目的を採用せんか試みたことあるか。

第五日 樂天的宗教

ヨハネの弟子およびパリサイの人つれに斷食する事ありければ、彼等イエスに來りいひけるはヨハネの弟子とパリサイの弟子は斷食するに汝の弟子は何ゆゑ斷食せざるか。イエス彼等に曰ひけるは、新耶の朋友その新耶と共に在る間に、斷食することを得べきか。かれら新耶と共に在る間は斷食することを得じ。將來かれら新耶をこらるゝ日きたらん。其日には斷食すべきなり。新しき布を舊衣に縫ひつくる者あらじ。若し然せば其新に補へるもの舊を綻ばして其破れかへつて悪かるべし。亦あたらしき酒を舊き革囊に在るゝ者あらじ。若し然せば新酒は其囊を破裂きて酒もれいで革囊も亦壞るべし。

新酒は新しき革囊に盛るべきもの也。一マカ二、一八一二二。

斷食は嚴格なる猶太人の間に行はれたる大切な宗教的儀式の一つであつた。これは宗教的悲哀と自卑の發表で、身體を苦めることによりてかゝる精神的情感を強くした。パリサイ宗とヨハネの弟子等は、耶蘇と其一團が此慣習を捨てたのを見て、一驚を喫せざるを得なかつた。耶蘇の答へは耶蘇の宗教的精神の嶄新なることを示めて居る。彼の弟子は婚禮に招かれたる賓客の如く喜んで居るのに何ぞ悲める者の如くに振舞ふべきや。斷食は實に彼の仲間の精神と矛盾して居つた。これ恰も舊衣を縫ふに、新しき布を以てし、或は舊き破れ易き革囊に盛るに新しき醱酵しつゝある酒を以てするが如きものであつた。されば耶蘇の宗教が從來の熱心な宗教と異なる所は、其陽氣快活なる性質であつた。これは耶蘇がヨハネの遁世的生活と自分の社交的生活の享樂とを對照した叙述を見ても(マタイ十二六一一九)これを明かにすることが出来る。しかも耶蘇は一定の家なくして、死出の

首途に就きつゝあつたのである。

禁欲的宗教の克己と神國に献身すること、異なる所ありせば其相違は如何。

第六日 待望め

其とき天國は燈を執りて新郎を迎へに出づる十人の童女に比ぶべし。その中の五人は智く五人は愚なり。愚なる者は其燈をざるに油を携へざりしが、智き者は其燈と共に油を器に携へたり。新郎おそかりければ、皆假寢して眠れり、夜半ばに叫びて新郎きたりぬ。出て迎へよと呼ぶ聲ありければ、その童女ども皆おきて其燈を整へたるに、愚なるもの智き者に曰ひけるは我等の燈熄えんぞ、願くは汝等の油を我等に分予へよ。智きもの答へて曰けるは我等と汝等とに恐くは足るまじ汝等賣者に往きて己が爲めに買へ、かれら買はんぞて往きしとき新郎きたりければ、既に備へたる者は之と偕に婚筵に入りしかば門は閉ぢられたり。斯くて後その餘りの童女きたりて曰けるは、主よ、主よ、我等の爲めに開きたまへ。答へて我まことに汝等に告ん我は汝等を知ずと曰へり。然れば怠らすして守れ汝等その日その時を知らざれば也。—マタイ二十五、一一—三。

主は直ちに來りて、其王國の建設に従事し給ふべしとは、初代基督教徒が熱心に待ち望んだ所の希望であつた。此期待が基督教徒の態度であつた。當時の時勢に照せば、これが神國の最高善なること、又われらは之が成就のために一身を捧ぐべきことを示めす手段であつた。若し耶蘇が今日棲息し給はゞ心をゆるめず待ち望むべきことを戒むるに、一層有力なる方法を講ぜられたであらふ。現今は常に斯かる終末觀を信ずることは出來ぬ。其期待は宜しく道德的及び社會的發展の希望と解すべきものであらふ。斯く解して、我等は果して尙初代基督教徒の感じたと同様なる價值と威權とを人生に與ふるが如き、人類の將來に對する偉大崇高なる宗教的觀念を懷き得るや。

強き社會的希望と信仰とは人の一生に如何なる影響を與ふるや。

信仰と社會に對する實行的努力とは相互に如何なる影響を與ふるや。

第七日 來らんとする喜悅

柔和なる者は福なり、其人は地を嗣^{ついで}ごころを得べければなり。饑渴^{うすかわく}ごころを慕^む者は福なり、其人は飽^あごころを得べければなり。矜恤^{あはれみ}ある者は福なり、其人は矜恤^{あはれみ}を得べければなり。心の清^{きよ}きは福なり、其人は神を見るごころを得べければなり。和平を求^{もと}む者は福なり、其人は神の子^こと稱^{なづ}せらる可^べければなり。義^{よき}ごころの爲^{ため}に責^{せめ}らるる者は福なり、天國^{てんごく}は即^{すなは}ち其人の有^あなればなり。—マタイ五、五〇。

耶蘇は山上の説教に於て、倫理的及び宗教的生活に對する自己の見解を明示して、これをば當時の人々の間に行はれたる思想と區別し給ふた。其處に神國の舞臺が出来た。當然非難譴責の言葉で始まるべきものと豫想せられた耶蘇の教訓は案外にも反對に自然に發する喜悅を以て始まつて居る。大なる善福が來らんとして居る。これを受け得る精神的資格ある者には、凡て豊富なる祝福が惠まれんとする。自己に對して聖き不安の念を感じ、社會的義と公道とを求むる者は、其希

望を滿されるであらふ(五章三、四、六)。一層高尚なる社會的美徳なる、柔和、清心、和平は悉く世に容れられて、勢力を得るであらふ(五章五、七、八、九)。しかし稱讚と約束との最高點は、正義を欲せざる所にこれを傳へ、これがために苦めらるる者に向つて示めされて居る(五章一〇—一二)。「以上の聖言は世界最大のものに屬す」とはヘーゲルの評語である。これは實に純粹なる宗教であつて、社會的理想に對する宗教的信念の生めるものである。

一週間の研究

以上研究したる聖句によれば、耶蘇は前途に對する大希望に心を注ぎ給ひしところが明かである。これは單なる豫望に過ぎなかつたけれども彼の精神は常に歡喜に溢れ、同じ希望を懷く凡ての人々を祝福するに足る程美はしきものであつた。人は宜しく一生を嗜して之れに到達せんと勵み、此大願望に他の一切の目的を從

はしむべしとは彼の主張にして、これがために衷心の努力を惜み給はなかつた。

一

彼は此大福祉を「神國」と稱し給ふた。最初の三福音書を一讀しても容易に了解さるゝことは、これが實に彼の教訓の要點であつたことである。併し彼は一度も此句の定義を示めし給はなかつた。彼は當然聽者が之れを了解せるものとなし、單にこれが既に近づきたれば人は其積りにて振舞ふべきことを告げ給ふに過ぎなかつた。彼等は此言葉を何と解したか。其言葉の示めす觀念は猶太民族の歴史的所産であつたが、我等も斯く解せねばならぬ。

猶太の豫言者は其不撓不屈の宗教的熱情をば専ら社會的及び國民的生活に對する正義の要求に注いだ。勿論國民の實生活、特に上流社會の現状は、必らずしも宗教的理想に符合しなかつた。豫言者を圍繞せる不正迫害がその忍ぶ能はざる所となつた所以のものは、全く彼等の衷心の倫理的な要求が甚だ切なるものがあつた爲めである。こゝに於てか彼等の正義に對する満足されぬ願望は將來理想通りに行はるべき時代をあこがるゝ熱情となつた。其時には神は親しく其聖手を延ばして、惡を罰し、善を擇び、律法を作り、虐げらるゝ者の權利を擁護し給ふであらう。此大いなる「エホバの日」は新時代、神國、神政治を建設するであらう。されば此言葉は特別無比なる民衆の最も喜ばしき宗教的精神が社會的理想となりしことを示めして居る。其要點は正しき社會組織を將來に具象せしむることである。豫言者は其まぼろしを實現せしむるために神の直接な奇跡を望んだけれども、彼等は親しく政治的生活の實際に觸れ常に人間の側から社會的活動に出でんことを要求して居つた。

プラトリーの共和國とモリアのユトビヤは理想主義の人々に訴へたる知的作物であつた。猶太の豫言者は其理想を實現することに成功した。彼等は宗教の力によ

りて神國の思想を一般國民の精神に打込み、これを將來子孫の服膺すべき傳習的
確信となすに至つた。

併し大思想が民衆に採用されるれば自然淺薄となりて、其知識と要求とに應ずる
ことが出来なくなつて来る。又國民的理想は數百年間傳はる間に其國民の推移變
遷に伴ひて變化する。猶太國民がアツシリア、ペルシヤ、羅馬の治下に來るや、
其自由は滅び従つて政治上の理想も墮落した。神國の希望は神學的、人工的とな
り、年代を豫定し驚くべき舞臺道具を備付けた計策となつて仕舞つた。斯かる姿
となつても神國の希望は解放、大國民及び將來の正義と同胞との光彩ある希望と
なつて、能く絶望的悲哀の間にありて國民の精神を維持することを得た。

耶蘇時代の民衆は大體に於て神國に對する天啓的思想を懷いて居つた。即ちこ
れは裁判の行動を以て始まりて光輝ある猶太帝國主義を以て終はる所の神聖なる
大團圓として來るべきものであると信ぜられた。耶蘇は此豫望の要領をわがもの

とせられたけれども、眞の精神的指導者であつたから民衆の希望を採用し更らに
之れを純化し且靈化し給ふた。彼は決して血を流し武力的革命を起すが如き計劃
に關係しやうとは考へられなかつた。即ち彼によりて猶太人のエホバは「天にいま
す我等の父」となり、進んでエホバの統治を民衆化した。敬虔なる猶太人は儀式的
律法を行はんことを神に望み、耶蘇は宗教的儀式に關して何等の告ぐる所なく、
却つて正義と愛とに關して大に訴ふる所があつた。彼の掌中に收められては、今
迄の猶太帝國主義の夢は變じて世界的人道主義となつた。彼は幾度も繰返へし力
を籠めて神國の來臨を説明するに生物の成長を示めす言葉を以てし、彼の思想は
一般民衆の間に行はれたる大激變的思想と離れて系統的發達の思想に向つたやう
に思はれる。これらの變化こそは、我等の解釋にして誤りなくば、神國觀の發展
に達する耶蘇の事業を示めすものであつて、これ實に近代人の向ふ所と揆を一に
せるものである。(詳しくはラウシエンブシ著「基督教と社會組織」第二章「耶蘇の社會的方針」條

下を参照)。

二

以上は歴史的考察である。我等は茲に再び此社會的理想が耶蘇に極めて鮮明に現はれて、彼はこれに向つて全力を注がれたことを力説せねばならぬ。耶蘇が斯かる態度を採られたのは當然であつた。既に彼は人間を愛し人間の團結を信じた以上は、愛に自由な活動を與へ萬人を一つにするが如き正しき社會組織の中に生活する神に満てる人類を想望するのは、彼に採りては満足すべき唯一の希望であつた。彼は凡て正義を渴望する者の神國に於て満足さるべきことを約束し、自ら進んで其首領となられた。神國は彼の祖國にして彼の心靈は其處にありて神と共に住んだ。彼は斯かる完全なる人類のまぼろしを前途に見つゝ、人々の怨恨を受けながらも泰然自若として一層幸福なる時代に人々を導かんことを求め給ふた。

神國は最高善である。神てふ觀念は哲學にありて最高にして最も深き概念である。神國てふ觀念は社會學及び倫理學に於ける最高にして最も廣き觀念である。この觀念は至つて高く廣くして、多數の人々は容易にこれを理解することだも困難である。狩獵を事とする蠻人が數百萬人よりなれる國民の社會的結合力や愛國心を理解し得ざる如く、今日の狹隘なる國家主義者が知的にも道德的にも世界的勢力及び關係の前に迷ふ如くに、今日家族と國家の名目を以て考へ慣れてる我等にありては、神國を現實として取扱ふことは容易ならぬことである。未だ到達せざる進化の境地を悟ることは知識の信仰を要求し、未だ確實有益なる要素を示めざる大なる道德的目標に向つて身を投ずるには品性の信仰を必要とする。今日神の支配する社會組織の實現と最後の勝利とを信ずることは過去百年前よりも一層の道德的勇氣を要する。併し今日こそは凡ての眞の信徒が昂然としてガリレオと共に「何と云つても依然として動く」と云ふべき時である。

何人^{なんびと}にても苟^{いやしく}も其^{その}心^{こころ}が神國^{しんこく}の思想^{しきう}によりて熱^{ねつ}せらるゝ者^{もの}は真人^{しんじん}である。苟^{いやしく}も此^{この}思想^{しきう}を愛^{あい}する者^{もの}は生命^{せいめい}の許^{ゆる}す丈^{だけ}け之^{これ}を實現^{じつげん}せねばならぬ。之^{これ}を試^{こころ}みる人^{ひと}は必^{かなら}らず苦^{くる}む。しかし苦^{くる}んでも試^{こころ}みないで居^をるよりは試^{こころ}みることは遙^{はる}かに幸福^{かちよく}にして眞正^{しんせい}の人^{ひと}たるに近^{ちか}い。『我がためにその生命^{いのち}を失^{うしな}ふ者は之^{これ}を得^うべし』である。

三

耶穌^{いえず}は「先^まづ神^{かみ}の國^{くに}と其^{その}正^{ただ}しきとを求^{もと}めよ」と我^{われ}等に命^{めい}じ、彼^{かれ}自ら先^まづ其^{その}命令^{めいれい}を履^り行^かされた。彼^{かれ}の一生^{しやう}の大^{だい}目的^{もくてき}は理想^{りきやう}の社會^{しやくわい}組織^{そしき}と完全^{くわんぜん}なる道^{だう}徳^{とく}であつた。若^もし耶穌^{いえず}が我^{われ}等^らの人間^{にんげん}善^{ぜん}の理想^{りきやう}であるならば、如何^{いか}なる善^{ぜん}でも耶穌^{いえず}と同一^{どうい}方向^{ほうかう}に進^{すす}まざる場合^{ばあひ}にはこれ^{これ}を善^{ぜん}と云^いひ得^えべきか。縱^{たとへ}令^{ひと}人^{ひと}が一私^{しじん}人^{ひと}としては無^む疵^{さつ}であつても、社會^{しやくわい}理想^{りきやう}に冷^{れい}淡^{たん}で、正^{せい}義^ぎの發^{はつ}展^{てん}と人^{じん}道^{だう}の擴^{くわく}張^{ちやう}の努^ど力^{りき}に對^{たい}して寧^{むろ}ろ敵^{てき}意^いを有^{いう}するに於^おては、果^{はた}して斯^かかる人^{ひと}は善^{ぜん}であるか。個^こ人^{じん}の完^{くわん}全^{ぜん}を熱^{ねつ}心^{しん}に望^{のぞ}んでも、若^もし

其^{その}内^{うち}に社會^{しやくわい}の改^{かい}善^{ぜん}に對^{たい}する熱^{ねつ}情^{じやう}がなかつたならば、これは人^{じん}類^{るい}團^{だん}結^{けつ}の精^{せい}神^{しん}を缺^かき從^{したが}つて愛^{あい}に缺^かくる所^{ところ}あるを以^{もつ}て未^{いま}だ基^き督^{とく}教^{きやう}に達^{たつ}せざるものと見^みねばならぬ。

設問

一、大思想の力

- 一、嘗^かつて我^わが宗^{しゆ}教^{きやう}教育^{きやういく}は神國^{しんこく}てふ觀^{くわん}念^{ねん}に觸^ふれしや。
- 二、此^{この}教^{きやう}訓^{くん}を學^{まな}びて何^{なに}かの感^{かん}動^{どう}を得^えしや。
- 三、聖^{せい}書^{しよ}研^{けん}究^{きゆう}團^{だん}全^{ぜん}體^{たい}が何^{なん}等^らの教^{きやう}訓^{くん}を得^えずと假^か定^{てい}せばこの教^{きやう}訓^{くん}は價^か値^ちなきものなりや。

二、神國理想の歴史的變遷

- 一、猶^{ゆた}太^たの豫^よ言^{げん}者^{しや}は神國^{しんこく}の理^り想^{きやう}を如何^{いか}なる形^{けい}態^{たい}にて認^{しん}めしや。
- 二、默^{もく}示^し的^{てき}希^き望^{ぼう}の性^{せい}質^{しつ}を述^のべ且^{かつ}其^{その}豫^よ言^{げん}的^{てき}理^り想^{きやう}より遠^{とほ}かりしことを告^つげよ。

三、神國理想に關する耶穌の思想と感情を最も善く示めす聖句を擧げよ。
此點より見て山上の垂訓を何と思ふか。

四、耶穌が其國民の傳習的希望を純化高上せしめたる點を問ふ。耶穌の精神に映じたる神國觀を略敘せよ。

三、神國觀の現代的可能

一、神國を傳へることは今日の傳道事業に如何なる價値ありや。

二、これが青年の宗教教育と道德的希望に如何なる影響を與へるや。

三、社會の動搖不安の時代に際して神國の信仰を有することが教會の指導力に對して如何なる影響を與へるや。

四、如何にして神國の希望は基督教生活に喜悅を増すや。

四、特別討議

一、人が神國を求むるがために如何に自己を示めすべきや。人が自己を發展す

るがために如何に神國を表はすや。

二、此思想は社會學的研究より得たる思想に宗教的動力を供するの觀を呈するや。

三、「神國」の如き社會的概念は其舊きがため又宗教的なるがために今日實際的効果ありや。

四、斯かる概念は全然宗教的とならずとも民衆を感化するや。

第五章 神の國と其活動

正しき社會組織は各人に對する最高義務なり

完全なる社會組織は最高善である。これは豊饒の土地や空氣中の酸素の如くに各人に提供されたる神の賜物である以上、我等は之れを採用して、出来るだけ完全なる社會に接近せんとを努めねばならぬ。しかし理想的社會を實現するために個人は何をなすべき責任あるか。社會は人に如何なる責務を負はするや。耶蘇は此問題を如何様に解せられたか。これはエミール・ド・ラヴェエ著『禮讓論』の中に巧みに告げて居る。曰く「最上の社會組織なるものがある。しかもこれは必ずしも常に現代に存する社會ではない。若しこれが現代に存するならば態々社會を變革せんと試みるに及ばない。然るに人間に對して最高善を成就するために存すべき善の立派な社會がなければならぬ。神は之れを知り之れを欲し給ふ。

之れを發見して建設するのが即ち人の責務である』。

然らば此最高善の完成に對する個人の責任は何か。

日 課

第一日 不生産的生活の報酬

また天國は或人の旅立ちせんとして其僕をよび、所有を彼等に預くるが如し。各人の智慧に従ひて、或者には銀五千、或者には二千、或者には一千を予へおき、直ちに旅立ちせり。五千の銀を受けし者は、往きて之を貿易し、他に五千を得たり。二千を受けし者もまた他に二千を得たり。然るに一千を受けし者は、往きて地を掘り、その金を藏せり。程へて後その僕等の主かへりて、彼等と會計せしに、五千の銀を受けし者、その他の五千の銀を携え來りて、主よ我に五千の銀を預けしが、他に五千の銀を儲けたりと曰ければ主かれに曰けるは、あゝ善かつ忠なる僕ぞ汝寡かなる事に忠なり、我なんぢに多くのものを督らせん。なんぢの主人の歡樂に入れよ。二千の銀を受けし者きたりて、主よ、我に二千の

銀を預けしが、他に二千の銀を儲けたりと曰ひければ、主かれに曰ひけるは、善かつ忠なる僕ぞ、なんぢ寡かなる事に忠なり。我なんぢに多きものを督らせん。汝の主人の歡樂に入れよ。また一千の銀を受けし者きたりて曰ひけるは、主よ汝は嚴人にて播かざる處より穫り、ちらさる處より歛むる事を我は知る。故に我懼れてゆき主の一千の銀を地に藏くし置けり今なんぢ汝の物を得たり、その主こたへて曰ひけるは悪しくかつ情れる僕ぞ、汝わが播かざる處より蒔り、散らさる處より歛むることを知るか。然らば我が金を兌換舖に預置くべきなり、然らば我が歸り刈りたるさき本と利とを受くべし。是故に彼の一千の銀を取りて十千の銀ある者に予へよ。それ有る者は予へられて、尙あまりあり。持たぬ者はその有る物をも奪るゝなり無益なる僕を外の幽暗に追ハやれ其處にて哀哭切齒するこゝろあらん。

一マタイ二十五、一四一三〇。

云ふまでもなく、耶穌は大に活動して居つた所の二人に同情を表したけれども不平を洩らし親分を批難して、預金を持ち出した者には同情がなかつた。耶穌は不生産的生活を送るは大罪の一なりと云ふ提言に同情せられたと思ふ。進化論と基督教とは此點に於て一致して居る。善事をなすべしと云ふ此教訓は、耶穌が死して斯世を去らんことを考へて居られた時に賜はつたものである。彼は未完成の事業として神の國に別れねばならぬ。自分の死後に、弟子達が主の命を俟たずして自ら進んで主の事業を發展せしむべきことを望み給ふた。特に事情が新になれば一層重大なる責任が彼等に加へらるゝこととなる。

此比譬を普通の學校生活の言葉に改め、學生中より三人の商人に比すべき三人の學生を描き見よ。

第二日 活動の要求

イエス、ガリラヤの湖の邊りを歩める時、シモンと其兄弟アンデレの湖に網うてるを見る。彼等は漁者なり。イエス彼等に曰けるは、我に従へ我汝等を人を漁る者とせん。彼等たち其網を棄て之に従へり。此より少し進み行きセバダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネの舟に在りて網をつくるふを見て直に彼等を召給ひしかば、其父セバダイを傭人と共に舟に遺して彼れに従へり。

一マカー、一六一二〇。

イエスこゝより進みゆき、マタイを名づくる人の税關に座し居けるを見て、我に従へと曰ひければ、起ちて從へり。

—マタイ九、九。

路を行くとき或人イエスに曰けるは、主よ何處に往きたまふとも我從はん。イエス彼に曰ひけるは、狐は穴あり。天空の鳥は巢あり。然も人の子は枕する所なし。又ある一人に曰けるは、我に従へ、彼いひけるは、主よ先ゆきて父を葬むる事を我れに容せイエス曰けるは死にたる者に其死せし者を葬らせ。汝は往きて神の國を宣へよ。又ある一人曰ひけるは主よ汝に従はん先ゆきて家人に別れを告ぐることを容せ。イエス曰ひけるは手を鞆に着けて後を顧みる者は神の國に當はざるなり。

—ルカ九、五七—六二。

耶穌が弟子達を招き給ふたことは、即ち彼が容易ならぬ事業に着手せねばならぬことを感ぜられたことを示めすものである。これは活動、奮闘、損失に向ふべき召命であつて、これに應ずるには一廉の勇氣がなければならなかつた。舟と網を捨てよと云ふことは四人の漁夫に採りては、疑ひもなく容易ならぬ提言であつた。併し彼は斷乎として之が敢行を要求せられた。マタイは役所の税取りの仕事

を止めねばならなかつた。彼等五人は此機縁に乗じて決意斷行を敢へてしたので、其名聲は今尙萬人に喧傳して居る。他の三人の名は湮滅して傳はらない。一人は性急に走り來りて、耶穌に其情熱を冷やされ、第二の人と第三の人は暫らくの猶豫を乞ひて、空しく浮世の係累に隠れて仕舞つた。農夫に關する一語は、穿ち得て妙にして寸鐵人を刺すの概がある。右顧左眄して居つては哇が眞直にならぬ。宜しく目前の仕事に心を用ゐねばならぬ。

始めの五人の中四人は慘死を遂げた。傳へられて居る。彼等が自分の利害のみを考へて居つた方が却つて賢かつたらうか。

第三日 無益なる談論

我を召びて主よ主よと云ふもの盡く天國に入るに非らず。唯これに入る者は我が天に在ます父の旨に遵ふ者のみなり、其日われに語りて主よ主よ、主の名に託りてをしへ、主の名に託りて鬼をわひし主の名に託りて多くの異能を行しに非ずやと云もの多からん。其時かれらに告げわれ嘗て汝等を知らず。

悪をなす者よ、我を離去れ。曰はん。是故に凡て我の言を聽いて行ふ者を磐の上に家を建てたる智人に譬ん。雨ふり大水いで風ふきて其家を撞げども倒ふるることなし。是磐を基礎と爲したればなり。凡て我の言を聽きて行はざる者を沙の上に家を建てたる愚なる人に譬へん。雨ふり、大水いで風ふきて其家を撞たば終には倒れてその傾覆おほいなり。マタイ七、二二―二七。

耶穌が宗教的談論の無益なることを深く感ぜられたことは明かである。彼の喜び給ふ所は、品性となり活動となり得るやうな、堅實なる情感と告白とのみであつた。言論は宗教の利益であると同時に邪魔であつた。宗教的情感には偉大なる活動力がある。しかし令言宏辭を以て之れを消耗し、之れを美はしき祈禱の文句に列べ立てることは、至つて易いことである。斯かる場合に於ては、これは偽物贗物にして、神の國を社會に傳へる邪魔となるのである。

自ら顧みて自分の宗教的談論は如何なるものなりと思ふや。
然らば寧ろ説教と公けの祈禱を中止する方がよいか。

宗教を言説することは如何なる影響を我等に及ぼしたか。

第四日 通過せる駱駝

イエス、エリコに入りて經行くとき、ザアカイと云へる人あり。税吏の長にて富める者なり。イエスは如何なる人なるか見んと欲へども身長ひくければ、大衆なるに因りて見るとを得ず。彼を見んとて趨りゆき桑樹に昇れり。イエスの道を過ぎんとする故なり。イエス此に來り仰ぎて彼を見いひけるは、ザアカイよ速ぎ下れ。我今日かならず汝の家に宿らん。彼いそぎ下り喜びてイエスを迎へたり。衆人之を見てみな怨言いひけるは彼は往きて罪ある人の客と爲れり。ザアカイ起ちて主よ我所有の半を貧者に施さん。若われ誣認て人より收めたる所あらば四倍にして之を償のふべし。イエス彼に曰けるは今日この家すくはるゝことを得たり。蓋この人もアブラハムの裔なればなりそれ人の子は喪ひし者を尋ねて救はん爲めに來れり。——ルカ十九、一―一〇。

ザアカイは、パレスチンの最も富有な土地にありて、羅馬の徵稅取立てと云ふ儲けは多いが後ろめたい仕事に従事して居つた。彼は政治家兼事務家で、所謂幸

運順境の種類に屬する人であつた。僅かに五尺の短軀なので狭き路に集まつた群集の中に立ち交りては、容易に行列を見る見込みもないので、樹に上つた。これ恰も一團の長が耶蘇を見ようとして、電信柱に昇つたやうなものであつた。此健氣な精神は深く耶蘇に愛でられ、耶蘇は早速彼と握手を交へた。耶蘇は税吏風情と交はらば、一層己が名聲を落すだらうと云ふことは、十分覺悟の前でこれをやつた。ザアカイは一舉にして今迄の不當利益を散じて、神の國に適するものであることを證明した。立ち處に財産の五割を捨て、殘額の中から四倍の賠償金を出して、最後に殘る所は幾干であつたか。駱駝は見事に針の穴を通つた。耶蘇は快哉を叫び給ふた。

如何なる點に於て青年男女の學生の道念が最も酷しき試験を受けるか、何時精神的果斷を要するか。

第五日 祈禱の意志力

イエスマた人の恒に祈禱して沮喪すまじき爲めに譬を 彼等に語りけるは或邑に神を畏れず人を敬はざる裁判人ありけるが、其邑に妾婦ありて我を我仇より救ひたまへと曰ひて彼に至りしに、かれ久しく肯がはざりしかど、其の心の中に思ひけるは我神を畏れず人をも敬はざれど此妾婦われを煩はせば彼が絶えず來りて我を煩はさる爲めに之を救はん。主いひけるは不義なる裁判人の言ひしことをきけ。況して神は晝夜祈る所の選びたる者を久しく忍ぶとも終ひに救はざらんや。

—ルカ十八、一一七。

耶蘇の祈禱に關する訓言を見るに、祈禱に言辭を弄すまじきことを戒め給ふたこと、(マタイ六、五—一三) 一層熱心に努力して祈るべきことを要求し給ふことであつた。寡婦と裁判官の話にありて、云ふまでもなく寡婦は不利の地位にあつた。一人の寡婦の身分として到底勝目はなかつた。これに對して裁判官は至つて難物で、宗教もなければ良心もなく、又社會の輿論に對しては厚顔者流であつた。それにも關らず、寡婦は強情一點張りで成功した。確かに持久不屈の寡婦と屈服

されたる裁判官とを案出した人は、大に氣力旺盛なる活動を嘆稱せられたことが分かる。耶穌は此精神と果斷とを祈禱に用ふべきことを要求し給ふた。併し此處に注意すべきことは、彼の目指した所は、個人の修養とか、私の利益のためなく、「神の選びたる者の救はれんこと」であつた。即ち世の不正不義を匡正して、義人を安からしむることを主眼とせられた。神の選民の狀態に深く思ひを注ぎ、兼ねて「飢渴義を慕ふ」ことを考ふれば如何にしても祈禱の精神を喚起せずには居られぬ。

世の罪惡に對して祈禱した經驗あるか。斯かる祈禱と自分の利益のためにする祈禱との區別如何
(靈交録第十章參照)

第六日 十二弟子の派遣

往きて天國近きに在りて宣傳へよ。病ひの者を醫やし癩病を潔くし死にたる者を甦らせ鬼を逐ひ出すことをせよ。汝等價なしに受けられたれば亦價なしに施すべし。汝等金または銀または錢を貯へ

帶ぶる勿れ。行囊二つの裏衣履杖も亦然り、そは工人の其食物を得るは宜べなり。凡そ郷邑に至らば其中の好人を訪れて出づるまでは其處に留まれ汝等を接けず汝等の言を聽ざる者あらば其家または其邑を去るとき足の塵を拂へ、われ誠に汝等に告ん審判の日到らばソドムミゴモラの地は此邑よりも却て易からん。身を殺して魂を殺すこと能はざる者を恐るゝ勿れ。

——マタイ十、七一―一、一四―一五、二八。

馬太傳十章全體は神國擴張のための壯烈なる傳道的精神を力説したものである。耶穌がガリラヤの村々に十二人の弟子を遣はしたのは、自分の活動を一層盛んならしめんためであつた。普通に社會指導者として打つて出づる所の教養ある有力な辣腕家は、自分の領土を建設せんことに没頭して其部下を傾使することを辭さぬ。耶穌はこれに鑑みる所ありて百姓や、漁夫や、手近に集め得る者を採用して、新規な指導者たるべきものを設けられた。耶穌はやがて反對に遇ふべきことを十分覺悟して、彼等を世に出してやつた。實際上、彼等は一人残らず、道の

ために殉すべき運命に遇はねばならなかつた。彼は彼等に告げて、死を鴻毛の輕きに比し、豫定の事業のために努力奮勵して、人々の心を指導して神國の觀念を懐かしむべきことを命じ給ふた。

今日人間社會を改造して社會的公正と同胞主義の基礎の上に置かんご試みつゝある男女は、果して十二弟子派遣の意義を繼承せる權利を要求し得るや。

第七日 義務を成し遂げて尙ほ足らず

誰か汝等の中に或は耕し或は畜を牧ふ僕あらんに、彼田より歸へりたる時、亟かに往きて食に就けさいふ者あらんや。反つて曰はすや我が食を備へわが食飲みおはるまで、帯を束れわれに事て後ならんち食飲すべしと、僕主人の命ぜし事に従へばさて主人かれに謝すべきか。然らじと我は意ふなり。斯れば亦なんぢら命ぜられし事をみなしたる時も我等は無益の僕なすべき事を行たるなりと謂へ。

—ルカ十七、七一—〇。

耶穌は屢々餘り好ましからぬと思つたやうな社會の事實に例證を取ることを取て辭し給はなかつた。茲にあるはシリアの小作人の殺風景な生活の叙述である。終日野に働きて、疲れ且つ飢渴を覺えて家に歸へつたとて、誰も構まつて呉れる者もない。そののみか、先づ食物を調理してこれを主人に出さねばならぬ。それからやつと其殘餘を口にする事が出来る。過分に働いて謝辭を受けるかと云へば、一言の謝辭もない。それで耶穌は云ふ、汝も我も、此氣の毒な人が止むを得ずやらねばならぬことをば、進んで自由意志を以てやらねばならぬ。一人前の仕事をなし終へたならば、今度は主義のためにもつと働いて、そして何等の謝辭をも斷らねばならぬ。斯かる壯烈なる奉公の精神こそは、實に人が神國の幻象にあると云ふことではない。靈感に溢れた強き人は、どれ程働いても、終には所期の半ばにも達せざることを歎ずるものである。マルテン・ルーテルが紙片に書きつけた最後の言葉は、『われらは乞食である。眞に其通りである』と云ふのであつた。

性來の懶け書生が少し働いたことを恩に着せて、教師や父親から讃辭を得やうとしたならば耶蘇はこれに向つて何ぞ云はるゝであらうか。

一週間の研究

近頃に至るまで畫家が耶蘇を描くに至つて柔和温良の姿を以てし、神學が其消極的受難に力を注いだことは奇異なることでなからうか。しかし耶蘇は精悍の人であつた。其奇警なる諷刺と人の意表に出づる誇張法とは答を以て打つが如き痛快なる趣きがあつた。彼は拂曉に起きた。何時も人間の窮乏に眼を注いだ。其父の御意を行ふことが己れの糧であつた。彼の生涯は戦闘であつた。彼は敢然反對に當り、死と知りつゝも『エルサレムに向はんと堅く定めた』。黙して法廷の前に立つた時も、十字架上に釘づけにされた時も、彼は靈力の活動であつて、人は彼の前に怖れを懷いた。

一

彼は他に勢力を及ぼした。單に雜談を交はし無益の談理を弄するは彼の欲せざる所であつた。ザアカイの場合の如き、或は中風病者を携へて屋根に登り穴を穿ちて之れを耶蘇の前に連れて行つた人々の場合に見るが如き、元氣ある行動は彼の稱讚に洩れぬ所であつた。彼は斯かることをば『信仰』と稱した。即ち耶蘇にありては信仰とは瞑目拱手することではなかつた。信仰とは山をも移す爆發物なりと云つた。三人の弟子に綽名を與へたが、いづれも勢よきことを示めて居る。シモンはペテロ即ち巖で、ヤコブとヨハネはボアネルゲ即ち雷の子であつた。彼は油斷せずに困難に向ふやうに弟子を派遣し、狼が彼等を待ち受けて居つても、これに對して進撃する機會あらば喜び大に喜べと告げ給ふた。我等は耶蘇が眞中から頭髮と鬚とを分けた見るから温和な毒のない人で、其弟子達を腰拔にして仕

舞つたと云ふ思想を全然取り除かねばならぬ。

耶蘇の眞精神は歴史上の基督教に未だ半分も働く機會が無かつたとは云へ、人間の全努力、莫大なる事業、緊張せる偉大なる活動力は、大に之れによりて増加したと云ふとは、考へ得らるゝことである。これを最少限に見積つても、眞の回心は悪習、飲酒、性慾力の濫用を廢すことであり、一層強き克己、一層忠實に義務を遂行すること、前途を達觀する一層高き眼識を得ることなるが故に、従つて一層立派なる働きをなすこととなる。これは自分にも他人にも親しく見る所である。緊張せる生活を送るためには、今尙嚴格なる必要に迫られ輿論の抑壓を受けねばならないが、これに内的強制が加はつて来る。基督者は心の中に巡查を連れて居る。基督教が眞に男女を取押へれば、特に其人々が手腕に富めば、これを驅つて道德的運動を起さしめ、人間進歩の通路を開かしむるものである。

基督教が斯かる場合を多くし、眞面目、義務、勞働を以て全社會の習慣となすに至れば立派に第一流の社會が出来て来る。何となれば人間と云ふ動物は生來無精懶惰にして單に今日のために生活しようとするものである。將來の利益のために目前の快樂を捨てようとする力が尠い。世道人心のために利己的慾情を捨てようとするは尙更尠いことである。

斯かる力が比較的大規模に於て働きつゝあるは基督教が新しき社會勢力として現れたる外國傳道地である。若しこれが或る社會の一階級或は一種族に働けば其結果は如何に現はれるか。此問題は五十年後の經過を俟つて定まることである。基督教の十分なる社會的結果は三代を経なければ見ることが出来ない。

基督教が精神的廓清を助けて道德的能力を十分に發揮するに至りたる場合には、人間の勞働能率の増加が明かに證明される。例へば和蘭陀、英國、佛國に於ける資本的産業の發達と和蘭陀のカルヰン派により生み出されたる眞率なる敬虔及び辛抱強き勤勉努力、英國の清教徒、併びに佛國のユーゲノゝ徒との間には

何等歴史的關係がなかつたらうか。

二

基督教が過去に於て人間の勞働能率と建設的社會能力に貢献したことは主として間接であつた。基督教の前に提供されたる大目的は其靈魂を永劫の罪ひから救ひ、今も後までも神と交はりを結び、且神を思ふ生活を營まんことであつた。これは個人的宗教であつて來世に専念して居つた。社會に及ぼせる結果は寧ろ副産物であつた。若し基督教が始めから神の國即ち理想的社會組織に同一の重きを置いたならば、其結果は今日如何であつたらうか。他の條件は同等なりとして、基督教者なる父母は他の父母より勝つて居る、何となれば彼等は義務の觀念と愛情とに於て勝り又は精神的事務に對する見解に於て勝つて居るからである。併し若しこれに加ふるに一層勝れる社會組織に對する宗教的熱情を懷き、高潔なる子女

はこれに對する貴き貢獻なることを信するならば、彼等の親心はどんな影響を受くるであらうか。宗教を信する教師、藝術家、科學者が個人的宗教の動機によりて働けば眞心こめて働くであらう。併し若し地上に神國を建設しようと云ふまほろしを懷き、自らこれに貢獻する所あらんとの確信があれば、彼の事業の性質は大に面目を新にするであらう。確固たる信念のある實務家は勵精事に當り、事務の約束を守り、傭人と得意客に對して公明なる處置に出づるであらう。併し若し其宗教が彼に教ふるに實務と基督教道徳との間に根本的矛盾なからしむるやうに、實業の行動を指導することを以てしたならば、彼の道徳的氣力は一大進展を見るであらう。

基督教社會に要する所のものは、宗教の權威を以て大なる社會的目標を掲げ、其良心に従つて之れに向ふことである。然らば宗教は立派に社會進化の實を擧げるに至るであらう。

これは決して他から基督教に移入された新要素でない。長く埋もれて顧みられなかつた所の耶蘇自身の教訓が復活したに過ぎない。何故にこれが後廻しにされて居つたかと云ふことの一大理由は、壓制國や掠奪的階級に支配されたる社會が社會組織の再建をなすやうな宗教を要求しなかつた爲めである。神國の思想は近代民主主義の勃興と共に覺醒したのである。而して今こそは其時期である。

三

神國と云ふ思想は或特殊の社會説と同一視すべきものでない。これは公正、自由、同胞、勞働、喜悅を意味する。凡そ社會組織と其運動が何物を貢獻するかを知らば、これによつて其價値の輕重を知ることが出来る。我等は古い理想を近代の言葉で以て解し、これを近代民主主義の言葉に移し、機械力、萬國平和、併びに進化的科學の言葉を以て表明する必要がある。併し我等は古き宗教的信仰と熱情とを

以て之れをはぐみ、これがために祈禱し得るやうでなければならぬ。

この地上に正しき社會生活を建設しようとする大事業は、苟も善なもの如何なる小事業でも悉くこれを採用せねばならぬ。良き家庭を作らんと試みる母、人々を養ふ農夫、子女を養ふ教師、凡ての人のために事實を研究する科學者、商業家、勞働者、技術家、又は遊戯の指導者であつても、苟も斯かる目的を懷き、全體の向上を計りて一層神意に近づかんとの進化的發展を試みんとする者は、悉く神國建設に貢獻して居るものである。神國は大事業で、凡ての小事業は其一部である。何人にも働く人は自分の適當の場所がある——懶惰者には場所はないが——此れあつて凡ての善き事業は宗教的光彩を飾つて来る。

宗教のかゝる社會的目的は我等の人格を向上し我等の心靈を救はんとする目的を損ふやうに思はるゝかも知れないけれども、併し斷じて斯かることのあるべき筈はない。時に暫らく斯かる現象を見ることもあらう。併し我等各自は自分を重

んじ決して自らを忘るゝ如きことはなく、誘惑と悲哀に對する眞劍なる奮闘は必らず自分の個人的要求に對して基督から力を與へらるゝことを知るであらう。やがては我等も基督と共に『彼等のために我は己れを潔む。これ彼等も潔められんためなり』と云ふに至るであらう。やがて神國の理想に對する服従、これがため努力、克己、乃至他と協力一致することは我等自らと道徳的性情に對して甚大なる影響を來らすであらう。體操はよいけれども、戶外に於ける眞の仕事に勝れるものはない。我等は神國建設のために努力することによりて、最も確實に救はれる。

凡ての大事業をなすに當りて、宗教的人物は意識的に神の保護に身を任せる。特に最大事業にありて然りである。久遠の力は我等の弱々しい働きと協力する。これあるがために我等の働きが浪費されないのである。我等は種を蒔き水を灌ぐけれども、神の日光がこれを照らすにあらざれば、我等の仕事は無用である。敬

虔謙讓ならざる人は愚者である。今や人間最上の精神的努力も空しくせられ、愛の王國から程遠くあるやうに思はるゝ時、神の助力と忍耐とを信ずるは、我等の最も必要とする所である。『天の地よりたかきのごとく、わが道は汝の道よりも高く、わが思ひはなんぢらの思よりもたかし。』

四

されば茲に一つの新しい耶穌の社會訓がある。團體的の道徳的理想は個人と人類とに必要なるものである。人は悉く自分の持場にありて、神の爲めまた神と共に正しき社會組織を現出せしめんために働かんと潔く決心せねばならぬ。人類は益々意識的活動を以て此社會的發展を遂ぐることを勵まねばならぬ。人類は自身に對し 又人類の中に棲息しようとする神に對して斯る義務を負うて居る。是非其神聖なる定命を成し遂げんと働かねばならぬ。『御國を來らせ給へ。御心の天

になる如く地にもならせ給へ。これが耶蘇の意識的進化案である。宗教社會學、及び倫理的活動はこゝに結合して完全なる統一體をなして居る。

これは學生に對して何を告ぐるや。蓋し萬事はこゝに發して來る。

第一、我等特殊の仕事の何物であれ、必らず之れを神と凡ての善人とが働きたつゝある共同の大事業に關係させねばならぬ。若し此關係を會得しなければ、我等は智慧も熱情もなき日傭人か奴隷に過ぎない。

第二、凡そ自分の畢生の事業を神の事業に關係せしめずして、神國を損うても己が慾望を追ひ利己のために之れを妨ぐる者は、己が國家を損はんとために給料を得る人のやうである。彼は彼よりも忠實に働いて居る凡ての人々の働きを一層困難ならしむる者にして、血を以て報いらるゝであらう。

第三、『身分は責任を生ず。若し我等が學問と教育に恵まれた場所に屬するならば何か餘分なことを要求される。例へば茲に現代に於て世界宣敎事業がある。

これを成就するための機關が出来て居る。雄々しき開拓者は死して後より來る大軍勢のために準備した。我等の生活はこれに参加するに足る丈の能力と道徳とがあるか。茲に次の二代に涉れる社會組織の基督敎化がある。我等の社會研究は神の計劃にありて何の役目をなすか、我等の同胞を虐待して己が私利を營むことに適するためか、或は我等が神國に行く道を示さんためか。

設問

一、我等の使用せざる保留物

一、何事も成さぬ人は社會に何程の用事あるや。生産能率の増加は進歩の證據となるや。

二、宗教は人性に保留しある精力を呼出す助けとなるや。

二、耶蘇の精力

一、耶蘇は如何なる程度まで大膽と精悍との證據を示めしや、基督教會は此事實を認めしや。藝術は彼を如何に描寫せしや。

二、耶蘇が眞劍の仕事を求めし證據を擧げよ。これは彼の心中にありて神國と如何に關係せしや。

三、彼が弟子の義氣を當然のこととして要求せし證據を擧げよ。

四、此精神は祈禱に關する見解に如何やうに影響せしや。

三、基督教と事業

一、基督教は嘗つて怠惰を獎勵せしことありや。若し然りとせばそれは如何なる種類の基督教なりしや

二、全體より見て基督教は仕事の能率を増せしや或は減せしや。これが歴史的證據を擧げよ。

三、若し亞弗利加土人が基督者とならば其經濟的能率を高くするや。若しメキ

シコ人が一層純粹なる基督教を採用せば能率を高むるや。其理由如何。

四、神國に於ける怠惰者の位置を問ふ。

四、神國理想が基督教に與ふる援助。

一、入信の召命は精神的平和を得んためか精神的精力を發揮せんためか。

二、基督教は人をして惡しき状態に満足せしむる『麻醉劑』なりとの考へは如何にして起りしや。

三、如何にして神國の信仰が普通人の働きに宗教的性質を與ふるや。

四、他のことを同等なりとして、宗教家は無宗教家に比して惡に對する戰鬥力を多く有するや少く有するや。

五、若し人が宗教の個人的觀念より社會的觀念に進まば、道德的行爲に如何なる變化を與ふるや。

六、神國の計劃は如何なる程度まで一般に承認されたる社會學的原理の動的發

現となるや。

七、男女學生の神國に對する特別の責任を問ふ。

五、特別討議

一、神國は將來神の働によつて出現するや、或は現今に於て人の働によるか、
兩者は互に相排斥するや。

二、今日の社會組織は労働者の十分なる精力と智慧とを呼び出すや。

三、過勞薄給の労働者は自ら神國のために働きつゝあることを感じ得るや。

四、神國は必ず社會的革新變化の要素を含むや。

五、過去に於ける掠奪的の支配階級は神國の社會的意義を傳ふることを許せし
や。

第六章 新時代と新標準

神國の來臨は倫理的標準を高くす

人間社會に神の統御を迎へるためには、其社會關係即ち倫理觀念の進歩がなけ
ればならぬ。これは新時代毎に當然起るべきもので、若し然らざれば社會は退歩
するであらう。第一、從來社會が承認し來れる道德上の主義が一層完全に行はれ
なければならぬ。第二、倫理觀念の勢力範圍が一段に廣汎となりて、今迄其治下
に這入つてなかつた社會にもこれを普及しなければならぬ。第三、新しき義務を
承諾し一層高尚なる倫理觀念を受け容れねばならぬ。
耶蘇は果して如何なる程度まで以上三個條の大要求を認められたか。

日 課

第一日 個人の悔改

アンナスミカヤバ祭司の長き爲りたりし時ザカリヤの子ヨハネ野に居りて神の命令を受け、ヨルダンの邊なる四方の地に來り罪の赦を得せんが爲めに悔改のバプテスマを宣傳へたり。預言者イザヤの言を記したる書に野に呼べる人の聲あり。云はく主の道を備へその徑を直くせよ。諸ての谷は埋められ諸ての山崗は夷げられ、風曲たるは直く崎嶇は易くせられ、人々みな神の救を見んことを得んこと有るが如し。茲にバプテスマを受けんきて來れる衆人にヨハネ曰けるは嗚呼蝮蛇の裔よ、誰が汝等に來らんとする怒を避くべき事を告げしや、然らば悔改に符へる果を結ぶべし、汝等心に我儕が先祖にアブラハムありき意ふこと勿れ。われ汝等に告げん神は能くこの石をアブラハムの子と爲らしむべし。今や斧を樹の根に置かる故に凡て善果を結ざる樹は伐られて火に投入らるゝ也。—ルカ三、二—九。

社會革新と道徳的進歩の端緒は、各人が眞面目に自己の罪惡を反省し、神と我との間に何等の隔意を設けないことである。これ基督教が個人の悔改を要求する所以である。人若し正しと信ずる所に従つて行動したならば、斯世は一變するであらう。然るに我等は一種の保護色的計策を以て自分を瞞着し、以て自らの威信を保たうとする。例へば普通用ゐらるゝ言葉を考ふるに、卑猥なる罪惡を飾らんとて華麗なる遁辭を濫用する。盗むことを『アツプする』と云ひ、瞞ますことを『胡麻化する』と云ひ、放飲することを『きこしめす』と云ふ。實際に當つて見れば、自ら微罪小過と目するものは、實は罪なき者を殺し、古今の人類を悲惨に陥れた所のものなることを認むるであらう。これを認むることが社會的希望の端緒である。個人の悔改は社會の進歩である。

パリサイ人は自らアブラハムの子孫にして神より特別の恩顧に浴して居ると誇つて居つた。學生間にこれに類する謬見がなからうか。

第二日 責任範圍の擴張

爰に一個の教法師あり起ちて彼を試み曰けるは師よ我なにを爲さば永生を得べきか。イエス曰けるは律法に録されしは何ぞ汝いかに讀むか。答へて曰ひけるは汝心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる汝の神を愛すべし亦己の如く隣を愛すべし。イエス曰ひけるは汝の答へ然り之を行はば生くべし。彼みづからを罪なき者に爲さんさてイエスに曰ひけるは我が隣は誰なるか。イエス答へて曰ひけるはある人エルサレムよりエリユに上るまき強盜に遇へり、強盜その衣服を剥取りて之を打擲き瀕死になして去りぬ。斯る時に或祭司この路より下りしが之を見過にして行けり。又レビの人も此に至り進み見て同じく過行けり。或サマリヤの人旅して此に來り之を見て憫れみ、近よりて油と酒を其傷に沃しこれを裹みて己が驢馬にのせ旅邸に携往きて介抱せり。次日いづるまき銀二枚を出し館主に予へて此人を介抱せよ費もし増さば我がへりの時なんちに償ふべしと曰へり。然ば此三人のうち誰か強盜に遇ひし者の隣なりと汝意ふや。彼いひけるは其人を矜恤たる者なり。イエス曰けるは汝も往きて其まき爲よ。一ルカ十、二五―三七。

これは内容豊富な名高き話である。法教師は斯かる實際問題を提出して、それに対する自分の返答はいやくながら極めて明瞭なもので、其通り身に行ふより外はなかつた。そこで新しい問ひを發して、言を曖昧の中に葬らうと試みた。「わが隣人を愛せよとよ、しかし我が隣人とは誰ぞ」と。我と共にありて兄弟の親交をなす隔離範圍内にある人は誰か。我と國を同らし、宗教を等ふる凡ての人々を指すのであるか。或は單に愛好すべき人々のみなるか。何處に親愛線を引くべきか。善きサマリヤ人の話は此處に始まる。「汝の隣人か。外國人と異教者が隣人である」。此際善き猶太人が負傷せるサマリヤ人を看護したとする方が一層要領を得た答へであつたかも知れぬ。併し耶蘇は主客を顛倒し、忌み嫌つてるサマリヤ人を以て摸倣すべき義人となして、質問者の肺腑を衝いたのである。此話を十分に解せんとすれば、當時猶太人と、猶太人の流竄の身となつて居つた間に其國土と宗教とを奪ひ取つて仕舞つた所の混血民族等の間には宿昔の確執があつたことを知

らねばならぬ。西班牙人とムリア人、クルド人とアルメニア人、セルビア人とブルガリア人などの事例を鑑みれば、此話の精神が一層鮮明になるであらう。

第三日 標準の高上

我等は正しと知る所を實行し、外國人及び異教徒をも倫理的義務の範圍内に包摂せねばならぬ。これのみならず一方に於ては、倫理的標準其物を高むることに心を注がねばならぬ。耶穌は明瞭に此主義を唱導して、山上の垂訓の一部に示し給ふた(マタイ五、一七―四八)。彼は其必要を論じ、且つこれが適用に對する六種の場合を告げられた。今其順序によつて研究して見やう。マタイは更らに耶穌の言葉の散逸せるものを纏めて其註釋の用に供して居るけれども、それは直接耶穌の訓戒とは關係しない。例へばマタイ五、二三―二六及び二九―三〇の如きこれである。今日及び次の四日間には全く直接耶穌の聖句によりて其精神の存する所を考へて見

やうと思ふ。

われ律法と豫言者を廢つるために來れりと思ふ勿れ。われ來りて之れをすつるにあらず、成就せんためなり。……我なんぢらに告げん、學者とパリサイの人の義しきよりも汝等の義しきこそ勝れずば必らず天國に入るこそ能はじ。―マタイ五、一七―二〇。

保守的な猶太人が直ちに耶穌の教訓の如何にも精神的自由と靈能に充てることに注意したのは明かなことである。彼等は耶穌が神聖なる律法を攻撃し、道德と宗教の根底を破壊するものと思つた。併し耶穌は此批難を否定した。彼の目的は破壊的でなく建設的であつた。彼は正義の一層重んずべきを主張された。正しき生活の活動範圍を擴張せねばならぬ。傳習的標準は最早新時代には適せぬ。人は之れを守つても未だ善人たることは出來なくなつた。學者とパリサイの人は猶太教の模範的教會員で信心の堪能者であつたけれども、神の國に入るには不十分であつた。

耶蘇の社會訓

我等も亦善人なれども未だ十分なることなきか。

第四日 憎惡の罪

古への人に告げて殺すこと勿れ、殺す者は審判にあづからんと言へることあるは汝等が聞きし所なり。されど我汝等に告げん、凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判にあづからん。又その兄弟を愚者よといふ者は集議にあづからん。又狂妄者よと云ふ者は地獄の火にあづかるべし。

一マタイ五、二二―二三。

モーセの律法には殺人が禁ぜられて居る。殺人者は法廷の裁判を受けねばならぬ。しかしこれ丈で人の生命と人格の神聖を未だ十分に十分であるか。これでは怒りや咀ひを以て人の心靈を苦しむることには全く觸れて居らぬ。耶蘇はこれらのことも罪惡として取扱ふべきことを提議された。故なくして怒ることは從來殺人に對したのと同じ思想を以て考へねばならぬ。又若し兄弟を罵り其道德的或は

知的價値を否定する如き者は、神の審判に附せられ、地獄の刑を受けなければならぬ。法律家が觀て以て犯罪行為となす所のものの中には、愛情なき言辭の如き微瑾を包括しないけれども、これは既に神の國の第一法則に反いたものである。

現代の社會生活にありて輕蔑は如何なる方法に於て現はれるや。
自重の精神の道德的價値は如何なる程度に於て評價されつゝありや。

第五日 性慾の罪

古の人に告げて姦淫すること勿れと言へることあるは汝等が聞きし所なり。然れど我なんぢらに告げん凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也。
また曰へることあり凡そ人その妻を出さんせば之に離縁狀を與ふべし然ど汝等に告げん姦淫の故ならで其妻を出す者は之に姦淫なましむるなり又出されたる婦を娶る者も姦淫したるなり。

一マタイ五、二七、二八、三一、三二。

以上二つの場合は男女間の道德に關する教訓である。古き法律は姦淫と家庭生活の背犯とを禁じたのみであつた。耶蘇は事物の根底に立ち入りて、色情と秋波とを誡め、これ犯罪の機會なきも一切の不淨不潔の源なることを教へられた。彼の倫理的責務の範圍は遙かに廣いのである。

離縁の法則（申命記二十四、一）の如きは、これは學者の解釋に従へば、男子に採りては至つて都合よきものであつた。男子は殆んど何んな理由でも其妻を離縁することが出来た。女子の唯一の保護となるものは儀式的の離縁状態で、これがあれば再縁が出来るのであつた。當時女子の經濟的及び社會的地位は全然自分の家族の狀態に左右されて居つたから、彼女の安危は男子の自由になつた。耶蘇は婦人に對してこれ以上の保護を要求せられた。彼は夫婦關係の決して再び離る可きものにあらざるものと信ぜられた。モーセの離縁法は當時の人民の低い道德觀に對する妥協であつた。理想は「一夫一婦」と云ふ造物者の律法であつた（マタイ十九、

三—八）。弟子達さへもこれに不服を唱へて、期かる六かしい關係であるならば男子に取りては結婚は左程幸福なものではないと云つた（十九、一〇）。

正當な自然の男女關係さ不倫不徳の慾情の差違は如何にして定めらるるや。

第六日 言葉の罪

また古の人に告げて偽の誓を立つること勿れ。なんぢ誓ふ所は必ず主に遂ぐべしと言へることあるは汝等が聞きし所なり。然れど我なんぢらに告げん更に誓ふこと勿れ、天を指て誓ふ勿れ。是神の座位なれば也。地を指して誓ふこと勿れ。これ神の足臺なれば也。エルサレムを指して誓ふこと勿れ。これ大王の京城なればなり。汝の首を指して誓ふ勿れ。そは一すぢの髪だに白くし黒くすること能はざればなり。汝等たゞ是々否々さいへ此より過るは惡より出づるなり。—マタイ五、三三—三七。

世の道德は誓約に重きを置いて居る。嚴かに神に誓つて事を約するも、一方に於て隣人を瞞ますことは、斷じて許すべからざる罪惡である。しかしこれは至つ

て便利である。そこで如何なる種類の誓言が有効で、如何なるものが無効であるかと云ふことに關して、詭辯を揮ふ樂みが出来たのである。誓言は世の眞實の價値を限定せんとする惡魔の仕草である。

法律上の目的のためにする誓言は如何。これは廢すべきものであるか。實際の效果は如何。

第七日 争鬭の罪

目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言ふことあるは汝等が聞きし所なり。然も我なんちに告げん惡に敵すること勿れ。人なんちの右の頬を批たば亦ほかの頬をも轉して之に向げよ。汝を認へて裏衣を取らんとする者には外着をも亦さらせよ。人なんちに一里の公役を強ひなば之に偕に二里ゆげ。汝に求る者には予へ借んとする者を卻くる勿れ。汝の隣を愛みて其敵を憾べしと言ふと有は汝等が聞きし所なり。然も我なんちに告げん汝等の敵を愛み汝等を誣ふ者を祝し汝等を憎む者を善視し虐遇迫害もなし。爲に祈禱せよ。如此するは天に在す汝等の父の子ならん爲たり。夫天の父は其日を善者にも惡者にも照し雨を義き者にも義かざる者にも降せ給へり。汝等おのれを愛する者を愛するに何の報賞か

あらん稅吏も然せざらん乎。安否を兄弟にのみ問ふは人より何の過れたる事かあらん稅吏も然せざらん乎。此故に天に在す汝等の父の完全が如く汝等も完全すべし。——マタイ五、三八—四八。

律法は復讐を欲する自然の願望を制限して、被害と同程度以上に出づべからずとなした。若し一本の齒を打ち抜かれたならば、一本の齒を打ち抜くは許さるべきも、二本或は全部を抜いてはならぬ。勿論復讐によりて怨恨が癒やされない。耶蘇は一步を進めて之れを制限し、愛情の行爲を以てのみ報ゆべきことを告げ給ふた。これが實に完全に争鬭を終はりて勝利を得る唯一の方法である。これによりて交情が恢復し、敵が殺されたのである。

律法は隣を愛すべきことを命じた。學者はこれに加ふるに敵を惡むべきことを以てした。耶蘇は好意親切の標準を高め、愛情の律法を萬人に應用し給ふた。自分を愛する者を愛するに何の讀むべきことはない。これは何人も出来ることである。貴き愛情は之れを報ゆる愛情のなき所に始まる。これを成し得る人が神と

親類の關係を結び、神の國に住むこととなるのである。

復讐に効果あることを證するが如き經驗ありしや。耶蘇の主張せられた無抵抗と臆病との差は如何に敵を愛するが如きことは實際上あり得るや。

一週間の研究

一

猶太教は未成品の宗教であつた。それが此宗教の神の感化によりて出來た一つの最も善き證據である。豫言者は前途に希望を懷いて居つた。重大なる事件がやがて起らんとして居つた。或る卓見家の云つたやうに、神が出埃及記に於てなせし古き神聖なる契約は廢せられて、新しい一層高尚なる關係が代はつて起るであらう。神は人々の心に其律法を記し給ふであらう。これまでのやうな外形の規律に對する古き訓練は消え失せるであらう、何となれば凡ての人は赦免と愛の內的

經驗によりて神を知るに至るであらう（エレヤミ三十一、三二—三四）。

耶蘇は宗教的新時代に對する此期待を懷かれたのみならず、これを以て彼の教訓の中心となし給ふた。彼にありては宗教は靜的のものでなく、其生活の舞臺は活動の世界であつた。新時代將に來らんとし、彼はこれが創設者たらんとした。

「バプテスマのヨハネの時より今に至るまで、天國は烈しく攻めらる、烈しく攻むる者はこれを奪ふ。」ヨハネは豫言者中最大人物であつた、新運動は彼と共に始まつたが、遙かにそれ以上のものが來らんとしつゝあつた。新時代の最小者でもヨハネ以上の有利の位置にあつた（マタイ十一、一一—一九）。

一般思想は新時代の全く神の奇蹟的交渉によりて來るべきものと期待して居つた。メシヤは天軍を率ゐて天より降り、羅馬人を退け、國民を裁判し、背後の猶太人を罰する、そしてそれから既に天にありては完全になりて待ち構へて居る新しきエルサレムが上から降り來ることと思つた。これが猶太の默示主義のユト

ピヤであつた。耶蘇は決して神の直接行爲と神秘的な大結末の意味を其豫望から取除かれることはなかつた。併し馬太傳十三章の如き生物發展より得たる彼の比喩にありては、寧ろ繼續的の靜穩なる生長の思想を敷衍し、これが神の裁判行爲に終はるべきことを示めされた。彼曰く、神の國は種を植えて自然の力の働くがまゝに任ずる農夫の如きものである、彼は毎日其働きに從事し、其間に小さき苗が現はれ、穂いで、重くなり、遂に收穫の時となる（マルコ四、二六―二九）。耶蘇は進化的思想を辿つた。これは彼の弟子達には至つて斬新なるものにして、耶蘇は反對を避けんために比喩を用ひられた。

斯かる神國觀は之れを人の行動に一層接近せしめた。これは既に活動し始めたもので、或る意味では既に現在行はれて居つた（ルカ十、二〇―二二）。それ故に之れが實現を助くることは出来ることであつた。

最も手易い義務は各人が自分の裏庭を掃除して、自分の罪を悔い改めることであつた。人は耶蘇が當時自ら生活せんと期待された通りに今日生活することによりて神國の生活に近づかねばならぬ。併し其言葉の示すやうに、耶蘇はこれ以上に進んで居る。彼は一般に承認されたる倫理的標準を高むることを要求された。これは單に誤つたり愚圖ついで居る個人の問題ではなく、行爲に對する社會的規範の問題であつた。彼は其國人の宗教に對しては深き尊敬と忠誠を示めし、弟子に向つて決して之れを破つてならぬと告げられた。併し彼は大膽に十誠と猶太神學者の解釋に基づきたる慣習的の猶太主義の倫理丈では十分でないことを斷言した。倫理其物は結構であるから、これに對して何等破壊的批評を試みることなく、唯これが『實行成就』さるべきことを要求された。

日課に掲げた六つの例は彼の道德的及び社會的進歩の主義を説明したものである、いづれの場合に於いても彼はあるが儘に律法を受容するけれども、同一事物に對してより以上を求め、人格に對して一層の尊敬、婦人に對する一層の崇信、

家庭に對する一層の堅實、一層の信と平安と愛とを求められて居る。これによりて彼は繼續と進歩、急進主義と保守主義とを結合された。

二

山上の垂訓に説かれたる倫理的進歩の綱領は大綱領である。トルストイが始めてこれらの簡潔なる文章の社會的意義を悟つた時に、彼の生涯は一轉機を劃した。基督教の超自然的要求を斥ける人々でも山上の垂訓の前には敬意を表する。しかし此教訓の運命は見じめである。これは「氣乗りせぬ讚辭を以て冷遇される」ことはなかつたが、一般の讚辭を受けながらも餘り功を奏しなかつた。其命令は餘りに高尚で何人も之を實行せねばならぬ義務あるとは感じない。單に基督教會の小部分のみが誓言、無抵抗主義及び愛敵の教訓をば其儘に受取つて服従すべきこと、思つて居るに過ぎない。併し凡ての人は倫理的及び社會的進歩の前途は耶蘇の辿

りし方面に存し、若し社會が現代の奪掠的な利己主義とこれに等しき下劣の奔から這ひ上ることが出来さへすれば、こゝに天國の將來を見るであらうと云ふことを感じて居る。

我等は果して之れを信するや。我等は精神的地獄や姦淫の詛ひから離れただけでは十分でなく、清き心こそ最も快活なる精神なることを信するか。我等は人を赦し好感を懷く人は、常に事を惡み心中にある魔女の憎惡の釜を搔き亂す人よりも幸福で安全であることを信するか。人若し敵を愛して他の頬をも向けたならば卑しき他人の靴拭ひとなるか或は尊き他人の避難所となるであらうか。今假りに喜んで自分の行動の標準として認め得る丈けの部分に注意して見やう。若し實行に適せずと思はるゝが如き部分があれば、これを疑問として残し置き將來の經驗を俟つて試めすべき保留問題となしこれを生活と云ふ學問の實行的假説として取扱はう。

併し或る單獨なる論點に關して如何やうに考へ得るとしても、我等は耶蘇の大主眼、即ち神國と云ふ眞の社會組織に向ふ進展は社會の認めたる倫理的標準の向上にありと云ふことを信じなければならぬ。これは苟も識者たる者の等しく牢記すべき社會進歩の主義である。

三

耶蘇が倫理的進歩の標本として六種の事項を擧げた時に、彼は決してこれを以て其懐ける進展の主義を云ひ盡す積りではなかつた。猶太の律法に關して云ふことはこれ以外にもあつた。今や基督者は在來の傳習的基督教の教ふる倫理思想に對するに、基督が猶太の律法を取扱つたと同じやうな敬虔と勇氣とを以て取扱はねばならぬ。

始めから基督教は克己と精神が物慾を支配すべきことを教へた。飲酒はその禁ずる所である。實は古代の基督教は決して醸酔酒を禁じなかつた。近代の酒精製造法及び大資本によりて之れを販賣する方法の行はるゝに至りて、危険は大に増して來た。近代學術の知識と共に飲酒の生理的併びに社會的問題は一層明かになつて來た。近代生活は敏活堅實なる活動に對して麻醉劑にかゝらない神経系統を必要とする。昔は「酒に酔ふ勿れ」と云ふたけれども、今日の基督教の精神と近代生活は「酒を飲み又酒を賣る勿れ」と云ふのである。

婦人問題が提供された時には、耶蘇は何時も婦人の味方となつた。當時婦人は人間の壓迫された半分であつた。歴史的基督教の態度は彼の精神と族長的家族の精神の混和せるものであつた。今日の基督教は尊敬と精神的評價を擧げて男女同等の程度或はそれ以上までも進んで居る。

始めから基督教には人を解放する力があつて其結果を政治生活に示さねば止まなかつた。併し壓制時代にありては、其政治道徳をば忍耐的服従に止め、壓迫さ

れた者があれば單に之れを基督教社會に受け入れて多少の自由を提供する丈けで満足せねばならなかつた。今日民主主義の時代に於ては、政府を私有物となすことを以て不道德となして居る。私人としてのみ善き生活を送るのは十分なる正義ではなくなつた。基督教は公的生活の倫理を要求する。

昔は「人を殺す勿れ」と云つた。今日は「若き者を早く苦役に服せしめて其生命を損ふ勿れ、貧困の恐怖のために生命の泉を凍らす勿れ、又戦争を中止せよ」と云ふ。

昔は「盗む勿れ」と云つた。今日は「兄弟より自ら働かずして利得を受くることなく、汝がこれより財貨として受くるものは生産的勞働を以て之れに拂へ」と云ふ。

四

斯くの如くに社會の道德的標準を高むる問題は主として青年の仕事である。山

上の垂訓は青年の口から出たもので、之れを活かすのは青年の活潑なる意氣である。老人の身體は謂はゞ水船になつて動きが取れぬ。精神的には因習の久しき慣習に絆され、手に這入つた富と地位とを平和に樂まんと欲する。我等も三四年の後にはこれと異らぬ者となるであらう。併し我等今青春の時こそは、宜しく基督の旗、正義仁愛の旗に従つて、前進し、これを前方の山上に樹つべき時である。我等は今よりも善き男女となる許りではならぬ。我等は斯世を去る時にはもつと善い世界として之れを後世に残さねばならぬ。若き日に信ずることは他日圓熟力量の時には何等かの形に於て實現するであらう。若し五萬の學生男女が耶穌基督の側に整列し、嘗つて基督が見たやうな眼識を以て現代を觀察し、如何なる點に於て道德の社會的標準が彼の精神と近代の要求とに矛盾して居るかを觀察し、そしてこれを匡正するために奮つて働くならば、世界は十年間に其結果を感ずるであらう。そしてこれがために努力する者は信仰によりて一層高く神の國に

生活し、其高貴なる精神の幾分を有するに至るであらう。

設問

一、舊標準に則ること。

一、學生社會が萬人の認むる勞働と名譽の標準に則りて生活せば其結果如何。

二、人の性質は道德的進歩を喜ぶか。

二、耶蘇の倫理綱領。

一、耶蘇の綱領は如何なる進歩を必要とするか。馬太傳五、一七—四八の主眼と耶蘇自身の試みし六種の應用を述べよ。此主義は彼の神國と如何なる關係を有するや。

二、我等は此主義に賛成するや。其應用に對して如何なる程度まで耶蘇に一致し得るか。

二、人が私的生活に於てこれらの金言を守らば多少なりとも満足なる生活を送り得るや。

四、若し實務或は公的生活に於て適當に之れを守らば如何なる程度まで自己の面目を保ち得るか。若し人が敵を愛し他の頬をも向けたならば、他人の靴拭ひとなるや或は他人の友人、避難所となるや。

三、現代の標準を高むること。

一、現代社會の認むる道德的標準を高むるを要する倫理問題ありや。

二、若し己が生命を嗜して或一つの進歩を得んとせば何物を擇ぶべきや。

三、十分なる社會的責務の範圍を擴張することは如何にして行爲の標準を高くなるや。誰が我が隣人にして、誰が隣人ならざるや。

四、特殊問題

一、新しき知的時代は近代科學の勃興と共に始まつた。新知識の結果として起

るべきものは如何なる新しき道德的標準なりや。

二、新しき經濟的時代は機械の發明と勞働の社會的組織に始まつた。新しき文明の富の結果として如何なる新しき道德的標準を生むや。

三、新しき政治的時代は民主主義の勃興に始まつた。如何なる新しき道德的標準が國家と都市の生活に べきや。

四、新時代は蒸氣機械の商業の開始に發したる世界大的關係に始まつた。國際的又人種間的關係に要する新しき標準は如何なるものなりや。

第三篇 社會の反抗的勢力

第七章 社會奉仕の指導

功名心の満足は人に奉仕するにあり

古來神の王國は人の理想であつた。之れを化して具體的に實現せんとすれば、人間の反抗的にして頑迷なる本能及び社會の保守的勢力に遭遇せねばならぬ。然らば耶穌は其障礙を何處に見出されたか。如何なる方面に於て斯かる反抗を豫期されたか。彼は果して功名心の勢力や權勢にあてがるゝことの如何なるものなるかを知り、又人が兎角財産に心引かるゝ事實を諒知されたであらうか。彼は宗教を以て神國建設の援助なりと感じたか、或は障礙なりと思はれしや、以下三章はこれらの疑問を解決せんとするのである。

第一日 眞の奉仕

ペテロ曰ひけるは主よ此譬は我等に言ふか、又は凡ての人に言ふか。主いひけるは時に及びて食物を與へしめん爲めに主人がその僕等の上に立てたる忠義にして智き家宰は誰なる乎。其主人きたる時に是くの如く勤めるを見らるゝ僕は幸ひなり。我まここに汝等に告げん其所有を皆がれに督さざらすべし。若その僕心の中に我が主人の來るは遅からんと思ひ、その僕婢を打ちたゞき食飲みして且酒に酔ひはじめば、其僕の主人おもはざるの日しらざるの時に來りて之を斬殺るし、其報いを不信者と同うすべし。僕主人の心を知りながら備へせず亦その心に從はざる者は拵たるゝと多からん。知らずして拵たるべき事を作しし者は打たる事も少からん。多く予らるゝ者は多く求めらるべし多く受くれば之より多く求むべし。——ルカ十二、四一—四八

前節(三五—四〇)は卒伍の忠勤を語り、此比喻は監部の責任を論じて、利己的統率と奉仕的統率との區別を叙したものである。執事長は大財産を預かり、男女使

用人の勞働を指揮し、給養物を配當し、家人全體の安寧幸福を支配して居つた。主人の留守中に彼の權力が絶對的に強くなつた。彼が之れを部下の幸福のために用ふれば、彼の力も名譽も一段の光彩を加へるであらう。之れに反して權勢を肆にして輕舉妄動に陥り、親方氣取りに部下を指揮する小暴君とならば、其報い靦面にめぐり來るであらう。凡ての人の義務は其人の智識と權力とによりて定めらるゝものである。これ故に若し人が統率の任に當り權力の加はり來れるを知らば一層義務の念を堅實にし、苟もそれに戻りて禍を招くことあつてはならぬ。權勢を獲て墮落せる例は古來歴史上に甚だ多く見る所である。

執事長の權能は即ち大地主全盛の時代に適用される。此譬を近代的に解し見よ。

第二日 權力使用の準備

惜イエス聖靈に導びかれ惡覺に試みられん爲めに野に往けり。四十日四十夜食ふ事をせず後うみた

り。試るむる者かれに來りて曰ひけるは、汝もし神の子ならば命じて此石をパンと爲し、イエス答へけるは人はパンのみにて生るものに非ず、唯神の口より出づる凡ての言に因るを録されたり。是に於て惡魔かれを聖京に携へゆき殿の頂上に立てて曰けるは、汝もし神の子ならば己が身を下へ投げよ、蓋なんぢが爲めに神その使者に命ぜん、彼等手にて支へ、汝が足の下に觸ざるやうすべしと録されたり。イエス彼に曰けるは主たる汝の神を試むべからず亦録せり。惡魔また彼を最高き山に携さへゆき世界の諸國とその榮華を見せ、汝もし俯伏て我を拜せば此等は悉くなんぢに與ふべしと曰ふ。イエス彼に曰ひけるはサタンよ、退け、主たる汝の神を拜し唯之にのみ事ふべしと録されたり。——マタイ四、一—一〇。

耶蘇の受洗は來らんとする神國のために身を捧げたる行爲であつて、これによりて彼は深き靈的經驗を得たのである。今や彼は高貴な指導權を與へられたる使命を感ずると共に、これに適はしき權能を直覺するに至つた。忽然として問題が彼の胸中に浮んだ。救世主の權能を如何に使用すべきか。如何にして指導の力を獲べきか。彼は砂漠にありてこれらの疑問に思ひを潜めた。上述の物語は指導者たる者の誘惑を示したもので、之れを次の三點に歸することが出来る、一、自己満足に思ひをめぐらすことなく、一意専心神意を遵奉せねばならぬ。二、人目を聳動するやうな奇跡的な見えを張つて一時の評判を博することによりて、權能を低落せしめてはならぬ。三、例へば威力を藉りるが如き、俗界の王者に降服することによりて、指導力を握つてはならぬ。

以上の問題をば官職、知的名譽、或は藝術的、成功を收めんとする青年に適用せば如何。他日自ら指導力を握らんとする問題を考ふるに當り、深く思ひを宗教的考察に集中せしことありや。

第三日 指導の新原理

其時ゼベダイの子等の母その子と偕にイエスに來り拜して彼に求むること有ければ、之に曰けるは何を欲ふか。イエスに曰けるは此二人の我子を汝の國に於て一人は汝の右、一人は汝の左に坐することを命ぜよ、イエス答て曰けるは、汝等は求むるを知らず。汝等は我が飲まんとする杯のみ、又

わが受けんとするマブテスマを受得るや。彼等いひけるは能くすべし。イエス彼等に曰ひけるは誠に汝等は我が杯を飲みまた我うくるマブテスマを受くべし。然るに我左右に坐ることは我賜ふべきに非ず。只わが父に備へられたる者は賜へらるべし。十人の弟子これを聞きて、二人の兄弟を憤れり。イエス彼等を召して、曰けるは、異邦の領主はその民を主たり、大人どもは彼等の上に權を操る、これ汝等が知ること也。然るに汝等の中には然すべからず。汝等のうち大ならんは欲ふ者は汝等に役する者となるべし。また汝等のうち首たらんは欲ふ者は汝等の僕となるべし。此の如く人の子來るも人を役ふ爲には非ず、反て人に役はれ又おほくの人に代りて生命を予へその贖をならん爲なり。

——マタイ二十、二〇—二八。

此聖句は當面の問題の根本原理を示めし、指導に關する社會的原理を最も鮮明に現はしたものである。茲に史上に見えたる二種の反對の指導の態度が記されて居る。サロメと其子等は耶蘇の都上りを以て王國建設のためなりと考へた。それで彼等は其時は顯官に任用するよう豫め契約せんことを希望した。耶蘇はこれに向つて斯かる地位は依怙最負や情實によりて定むべきものでないと答へられた。

神國の指導に對しては相當の價を拂はねばならぬ。そして最後の名譽は神のみ之れを與へ給ふのである。彼は彼等の願望が兼ねて彼の快からず考へて居つた思想に後戻りするものであることを認められた。凡て政治上の機關を見るに、其權力を揮ふに當りて民衆を壓制する。併し新しき社會組織にありては、斷然之れを廢止せねばならぬ。功名心の満足は義勇奉公によりて全ふせられ、身を堵して奉仕することによつてのみ名譽を博することが出来る。耶蘇は自ら此新き種類の首領たらんと期し、民衆の救済のためには進んで身命を投すべきことを誓はれた。

耶蘇は茲に活動の二種の主義の一を選擇すべきことを我等に要求されて居る。われらは既に選擇して居るか。

耶蘇は我等に社會奉仕をなす人の眞價値を定むる標準を與へられた。我等は嘗つて之れを應用せんを試みしことがあつたか。

第四日 治者の沿革

また一の譬を聞け、ある家の主人葡萄園を造り、籬を環ぐらし、其中に酒樽をほり、塔をたて、農夫に貸して他の國へ往きしが、果期ちかづきければ、其果を收らん爲めに、僕を農夫の所に遣はせり。農夫ども其僕者を執らへ、一人を鞭うち、一人を殺らし、一人を石にて撃てり。また他の僕を前よりも多く遣はしけるに、之にも前の如くなせり。我子は敬まふならんと言ひて終に其子を遣はし、に、農夫等その子を見て互に曰けるは、此は嗣子なり、率これを殺るして其産業をも奪るべし。即ち之を執らへ葡萄園より逐出だして殺るせり。然らば葡萄園の主人きたらん時にこの農夫に何を爲すべき乎。彼等イエスに曰けるは此等の惡人を甚たく討滅し期に及びてその果を納むる他の農夫に葡萄園を貸すべし。イエス彼等に曰けるは聖書に工匠の棄てたる石は家の隅の首石となれり。是主の行給るごに於て我儕の目に奇とする所なりと録されしを未だ讀ざる乎是故に我なんぢらに告げん。神の國を汝等より奪ひその果を結ぶ民に予らるべし。この石の上に墜るものは壞れこの石上に墜つれば其もの碎かるべし。祭司の長等もよびパリサイの人かれの譬を聞きおのれらを指して言る

を識り、イエスを執へんご欲ひ謀かりしかど唯民を畏れたり。蓋人々かれらを預言者ごすれば也。

—マタイ二十一、三三一—四六。

祭司長、律法家、及び長老の代表者は耶蘇に來りて、何の權利を以て斯かることをなすやと尋ねた。彼は之れに答ふるに、然らば彼等は果て何の權利を以て斯かることを行ふやを以てした。葡萄園の比喻は猶太の爲政者の道德史の梗概である。其狀恰も葡萄園の借用者が主人の不在を奇貨として自分の預かり物を消費し、不遜にも主人の使者を擲りつけ、そして鳥を自分の所有にして仕舞つたやうなものである。猶太史にありて神が要求した正義は悉く權力ある者によりて斥けられた。然らば彼等の要求せる權力は果して正當であつたか。彼等が斯く指導者たるの任務を全ふせざるに於ては、宜しく其權力を剝奪して其是非を判斷すべきではあるまいか。指導者の利益と名譽を擅にしなから神と人とに對する高尚なる義務を果さざる者の特色は、歴々として此條下に示めされて居る。

耶蘇の此批難は種々なる社會主義の學說と歴史上の革命思想と何等かの關係あるか。

第五日 治者の起訴

其時イエス人々を弟子に告げて曰ひけるは、學者はパリサイの人はモーセの位に坐す。故に凡て彼等が汝等に言ふことを守りて行ふべし。然るに彼等が行ふ所を爲すこと勿れ、蓋かれらに言ふのみにして行なはざれば也。また彼等は重くかつ貢ひがたき荷を括りて人の肩に負はせ、己は一の指をもて之を動かすことすら好まず。彼等の行ひは凡て人に見られんが爲めにする也。その佩經を幅潤くし其衣の裾を大いにし、また筵席の上座、會堂の高座、市上の間安、人々よりラビ、ラビと稱へられんことを好む、汝等はラビの稱を受くること勿れ、蓋なんぢらの師は一人すなはちキリストなり。汝等はみな兄弟なり。また地にある者を父と稱ること勿れ。汝等の父は一人すなはち天に在る者なり。また導師の稱を受くること勿れ。蓋なんぢらの導師は一人すなはちキリストなり。汝等のうち大なる者は汝等の僕と爲るべし。凡そ自己を高ふする者は卑くせられ、自己を卑くする者は高せられん。噫、なんぢら禍なるかな、偽善なる學者はパリサイの人よ。蓋なんぢら天國を人の前に閉ぢて、自ら入らず、且いらんとする者の入るをも許さざれば也。——マタイ二十三、一一—一三。

學者とパリサイ人に對する嘲笑冷語は偶々宗教界に於ける利己的推導者に對する頂門の一針である。其主要なるものは如何なる宗教にも、何處の歴史にも、共通せるものである。即ち巧言令色にして仁義の行動に乏しく、指動者の利益のために民衆を屈從せしむるために宗教を變じて律法、重荷となし、名聲を博するために宗教を利用せんとする功名心これである。耶蘇は斷然名義稱號を捨て、權勢によれる粧飾的満足に安んずべきにあらざることを入々に命ぜられた。彼は民主主義、謙遜、友愛を要求せられた。

以上の叙述は正しく現代の基督傳道者にも適應すべきか、或は既に此職務は一大歴史的變化のために専ら奉仕を旨とする職務となつたか。
現代の社會生活にありて今尙利己的指導に對する耶蘇の非難が適用せらるるは如何なる方面であるか。

第六日 滅びたる指導者

當時ペテロ弟子等（其集れる者おほよそ百二十人なり）の中に立ちて曰ひけるは人々兄弟よ、聖靈
 ダビテの口によりて、イエスを捕へる者を導びけるユダに就きて預かじめ語りたる此聖書に必らず應
 ずべかりしなり。蓋彼も我等と共に列なりて此職を任けたればなり。斯人は不義の價をもて地所を買
 ひまた倒まに墮ちて真中より裂ぶれ其腸こまぐく流出でたり。此事エルサレムに住る凡の人に知れ
 しかば其地所を方言にてアケルダマと呼ぶこれを譯せば血の地所なり。詩の篇に録して彼の家は墟く
 なれ其中に住居する勿れ、彼の職は他人に得させよと云り、——使徒行傳一、一五——二〇

ユダの性格と動機は未解決の謎である。金錢が彼を迷はしたことに就いては福音書の等しく認むる處である。併し苟くも耶蘇が選抜し信任した者が、單にそんな陋劣は動機に支配さるゝものと考えることが出来やうか。彼はガリラヤのメシヤに對する功名心を燃やし、しかも耶蘇が此希望を満さなかつた爲めに失望した

のではなかつたらうか。彼は耶蘇の革命的行爲を敢行すべきことを希望して居つたのではなかつたらうか。兎も角ユダは單に人目を避ける盗人でなかつた事は明かである。ミラノにあるルーベンスの聖餐式の圖にありては、ユダは確乎とした氣高い顔であるけれども、憂愁不安の眼付は傷める心を示めして居る。他の弟子達は彼が師と其味方を裏切つたことに痛く心を動かされて居る。ユダは滅びる指導者の好箇の實例である。『唯一握の銀のために、唯上衣に着けるリボンのために彼は我等を見捨て、行つた』。一たびは迷うて後改悛する指導者もある。標準を低めて遣つて行く者もあり、又職を賣る者もある。ユダは生存しきれなかつた。ジエームス・ラッセル・ローエルの『無上の安慰』參照。

現今官職 或は金錢を得んために主義を放棄し或は裏切りした人の實例を知るか。何人にもあれ三十金を私しせんために人情を放棄せしものありや。

第七日 新しき指導者

イエス遍れく都邑を廻り、その會堂にて教へをなし、天國の福音を宣傳へ、民の中なる諸の病を癒せり。牧者なき羊の如く衆人なやみ又流離になりし故に之を見て憫みたまふ。其の弟子等に曰ひ給ひけるは、收稼は多く工人は少し。故に其稼主に工人を收稼場に送らんことを願ふべし。

借イエスその十二弟子をよび彼等に汚れたる鬼を逐ひいだし又すべての病すべての疾ひを醫やす權を賜まへり。その十二使徒の名は左の如し、首にはペテロと名付け給ひしシモン、その兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブの兄弟ヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、トマス、税吏マタイ、アルバイの子なるヤコブ、マタダイと名くるレツバイ、カナンのシモン、イスカリオテのユダ、是すなちイエスを賣し者なり。——マタイ九、三五—十四。

此聖句の一部は曩に耶穌の社會的精神の發表として研究したとがある。僧侶、律法家、其他聖書に通曉する者の數は多けれども、民衆の友となるべき牧者は一

人もない。耶穌が使徒を任命された時には、指導者の新しき種類を開始されたもので、即ち他に奉仕して人を使役せざる一團の人々が出来たのである。彼の教訓(第十章)を一讀するに、十分注意して利己的利益を收めざるやう命ぜられて居る。奉仕對使役これが彼の名によりて指導者たることを要求する凡ての人々の試みである。これは宗教界に於て明かに現はれるものである。併し此同じ試みが等しく政治家、實業家、其他の職業に従事する人々に對しても行はれぬであらうか。よしや掠奪的行爲は左程大なる恥辱にあらずとしても、少しでも道徳的と云はれやうか。

我等自ら人に對する態度は果して如何。

一週間の研究

一

他を指導し、これに勝らんとする願望は自然にして又正當である。人は群棲的なが故に、其社會團體は指導者を要し、且つ社會の進歩は重もに適當な指導者を得ると否とによりて定まる。生れながらにして指導の才能を有する者——併びに單に之れを有すると思つて居る者——は常に此望みを満足せしめんとの熱望がある。學校生活は初心なる慾望と他を指導せんと試むることの箱庭である。

耶蘇は決して自己抹殺や才能抑壓を要求されなかつた。彼は貴き自己主張の表明を歡迎された。彼自身のメシヤの召命は最高の指導者たる天の命であつた。彼の受けた誘惑は指導者問題の決定であつた。エルサレムの都に對する最後の悲嘆は民衆を自分に従はせることの出来なかつたための悲みの叫びである。

諸彼は神國建設のために人々を率ゐんとて其間に這入つた時に、早くも彼の來らぬ前に勢力を占めて居つた者に遇つた。即ち、經濟的活動を支配せる富者、猶太の手に残れる政權を握れたる官吏階級、その他法律家、神學者、僧侶、及び最も宗教的なる人々の宗教的生活を支配せしゼロツトの如きものがあつた。これらの階級は互に重なり合つて、一括して國民の寡頭政治を構成した。兩者は直ちに氷炭相容れざる根本的矛盾あることを認めた。争闘は劇甚を加へ、遂にエルサレムに於ける最後數日間の大血闘の現出となるに至つた。此争闘に於ける耶蘇の奮闘振りには、以上研究せる章句及び其他に記されて居る。

二

ヤコブとヨハネに對する徹底した回答には耶蘇の政治的意見が組織的に示されて居る。『諸々の國民の支配者は其民を宰り、其大なる者は力によりて他を服せし

「ひることを汝等（なんぢら）は知る」とは彼の告ぐる所である。蓋し初代創草の時代（じだい）にありては國家（こくか）は征服（せいふく）せる團體（だんたい）が征服（せいふく）されたる者を壓服（あつぷく）し又之れを掠奪（りやくだつ）する手段（しゅだん）に供（きょう）せられた。これまでの政治史（せいし）が國民（こくみん）が國民（こくみん）により、階級（かいきゅう）が階級（かいきゅう）によりて組織的（そしきてきだつりやく）掠奪（りやくだつ）を受くる記録（きらく）なることを知らざる人は、尙學（なほまな）ぶべき教育（けいいく）の殘つて居ることを知らねばならぬ。

政治上（せいぢやう）の指導者（しどうしや）たるものが一見（けん）掠奪的（りやくだつてき）ならずして眞（しん）の下民（かみん）のために畫策（くわくさく）するに當りても、下民（かみん）はこれがために尠（すくな）からぬ價（あ）ひを拂（は）はねばならなかつた。武（ぶ）を以て天下（てんか）に覇（は）を稱（しょう）した豪傑（ごうけつ）は自ら王位（わうゐ）に登り、更に之れを己（おの）が子孫（しそん）に傳（つた）へ、弱者（じやくしやく）を民臣（みんしん）として自己（じこ）の壯觀（さうくわん）を飾（かざ）る用に供（きょう）した。封建時代（ほうけんじだい）の貴族（きぞく）は草創（そうせん）戦乱（せんらん）の時代（じだい）には偉功（ゐこう）を樹（た）てたけれども、一たび功業（こうごふ）終（お）れば數百年（すうねん）に涉（わた）りて下民（かみん）から貢物（みつぎもの）を徵（ちやう）し賦課（ふくわ）を事（こと）とした。近代（きんだい）の實業家（じつげや）は公共團體（こうきうだんたい）を組織（そしき）して大（おほ）に盡（つく）す所（ところ）あつたが、今（いま）や彼等（かれら）は公道（こうだう）と國民生活（こくみんせいかう）に樞要（しゆやう）なる設備（せつび）を壟斷（ろうだん）して居るから、今後（こんご）其子孫（そのしそん）或（あるひ）は讓受（じやうじゆ）

人が莫大（ばくだい）な投資（とうし）によりて永（なが）く利潤（りじゆん）を收（と）むるやうにならば、これは寧（む）ろ高價（かうか）なる仕事（しごと）である（と）云（い）はねばならぬ。權力（けんりき）の恩惠（おんけい）は不思議（ふしぎ）に歲月（さいてつ）の推移（すいゐ）につれて失（うしな）はれて仕舞（しま）ふけれども、位階（ゐかい）、爵祿（しやくろく）、特權（とくけん）、收益（しゆえき）の如（ごと）きものは周到（しゅうたう）なる注意（ちうい）に保護（ほご）せられ、一人（ひとり）之（これ）を失（うしな）へば他（た）の人が之（これ）を繼（つ）ぎ、そしてこれがために苦（くる）む者は何時（いつ）も民衆（みんしゆ）である。

神國（しんこく）は人類（じんるい）が過去（かこ）より繼承（けいしやう）し來（きた）つた暴戾（ぼうれい）なる制度（せいど）に對（たい）して友愛正義（いうあいせいぎ）の制度（せいど）を置くものである。新（あたら）しき制度（せいど）には新（あたら）しき指導者（しどうしや）の王朝（わうてう）がなければならぬ。何（なん）となれば如何（いか）なる社會組織（しゃくわいそしき）にても必（かな）らずこれ相應（さうおう）の貴族（きぞく）的（てき）な所（ところ）がなければならぬ。耶蘇（イエス）は統御者（とうぎよしや）を廢止（はいし）せんと企（くは）てなかつたけれども、舊（ふる）きものと全然（ぜんぜん）趣（おもむ）きを異（こと）にしたる偉大（ゐだい）なる新（あたら）しき標準（へうじゆん）を作（つく）らんとし、『汝等（なんぢら）の中（うち）大（だい）なる者（もの）とならんと（の）功名心（こうめいしん）ある者（もの）は却（か）つて召使（めしつかひ）となるべく、第一（だいいち）位（ゐ）に居（を）らんと欲（ほつ）する者は奴隸（せらい）たるべし、人（ひと）の子（こ）來（きた）りしも人（ひと）をして己（おの）に仕（つか）へしめんとするた（た）めにあらずして、人（ひと）に仕（つか）へ且（かつ）つ多く

の人の身代りとなりて生命を與へんためなり」と云はれた。才幹と功名心とは尙人を統御すべきも、萬人に仕へると云ふ條件がこれに加へられなければならぬ。人を殺し人を征服する者でなく、人を安らかにし幸福ならしめる者が、名譽の彫像を建てられるべきものである。大なる武人や殺戮者でなく、大なる治療者、草の葉と麥の穂と馬鈴薯とを大きくする者が名譽を得ねばならぬ。名譽を得んとする心が強い丈け一層奉仕に努力せねばならぬ。若し一等賞を欲するならば甘んじて奴隸の仕事に服さねばならぬ。舊式の統御は人を踏み倒して其上に乗ることであつた。新式の方法は自ら卑くなりて人を押し上げることである。

三

耶穌は自ら新式の統御者たらんとせられた。十字架が其一貫せる主義の結果であつたことは彼の言葉によりて明かである。弟子たる者のために定められたる律

法は利己的獲得を禁ずることに重きを置いた。「價なしに受け價なしに與へよ。財布に金銀銅貨を收むる勿れ、旅行のために袋も上衣も靴、杖も携ふるに及ばない。何となれば工人が其食物を得るは當然である」。眞に民衆の状態に注意した宗教家は屢々全くこれと軌を同うして絶乎たる純御を試みんとしたのは趣味あることである。アシ、のフランスは其「小さな兄弟」を集め、ピーター・ワルダスは聖書教師、ウキクリフは『貧しき説教者』、ジョン・ウエスレーは田舎の説教者と巡回者、ウキリアム・ブースは軍旗と太鼓を携へた士官を集め、其他凡て外國傳道に従事せし人々も民衆の友となり僅かに衣食の資を供せらるれば足れりとなした。今日實際基督教宣傳者なる最も大切なる團體は擧つて奉仕を以て指導者の控となして居る。嘗つて少くとも上流の宗教家には働かずして富み、役得に衣食して傲然他を睥睨した者もあつた。併し今は清貧に安んずる職業となり、よしや種々なる缺點を遁るゝこと出来ないとしても不正の利潤を收めることはなくなつ

た。

そこで問題は他の職業も同一の歴史的經過によりて廓清の實を擧ぐべきや否やと云ふことである。宗教的精神は開拓的性質を有し、其熱情に驅られてやがて寛宏なる社會運動や歴史的發展が起つて來る、貪慾なる首領は先づ宗教界に容れられなくなり、尋いで政治界實業界に於ても容れられなくなるであらう。文明の趨勢は薄給を受くる知的仕事に向ひつゝある。教育者、裁判官、科學者、醫者は今や此標準に近づいて來た。これらの地位を利用して私利を收むることは彼等の潔しとせざる所である。血精療法に關する大発見者は黄金の川に立ちて渡し錢を取つてもよい筈であつたが、これを試みなかつたのは基督教の標準に則つたからである。今まで政治上の特權を利用して不正の金銀を收めた所でも、今は官吏が熱誠なる公人となつて居る。嘗つて非凡の手腕家が其一生の終りに於て民衆の福祉に對して毫も關係努力する所なかつたと云ふ批難を受けたことがあるが、此批評

の當れるや否やは別として、かゝる見解は確かに採用すべきものである。實業も同じく奉仕の法則の下に入るべきものであるか、或は商業には元來之れを求め得ざるものであるか。知識と品性とを有する實業家の精神には著しき變化ありて單に目前の要求に拘束されざる見識を持つに至つたことは、幾多の證據によりて之れを徴することが出来るやうになつた。不潔なる工場地から數百萬金を收め、婦人と年少者とを驅使し、貧民窟から二割の利益を得、工賃不足のために男女の結婚を不可能ならしめ、物價騰貴と將來に對する恐怖心のために出産を妨げるもの——斯かる資本家は最早舊式となつた。これは基督教以前異教時代の産物である。資本家が自ら進んで權力の濫用を中止するか或は強制的に變革を齎らすか、残つて居る問題である。舊式に停止する人は道德怠慢者となり、其富は永へに其道德的鈍感を暴露するであらう。

國民は種々なる指導者を要する、保守的農夫に科學的方法を採用せしめ、浪費

的な民衆に自製の價値と共同賣買の美點を教へ、年少者を奪ひ去りて土地は荒蕪し水は流れず森林は枯れ行きて以前に劣れるものとなすことの罪惡なることを社會に教へ、不動産等の價格の自然騰貴を禦ぎて健全なる家屋を民衆に與へ、危險なる製造業を安全ならしめ、資本家と労働者間の關係を公正と善意の基礎に置き工業上の平和を確立することなどに努力する指導者を得ることは目下の急務である。斯かる事業は實業的才能ある青年の意に投ずるか、或は彼は寧ろ百萬金を以て家を建て獨り子を養育することを希望するか。由來文明は専門的方面には成功したけれども倫理的方面には失敗したことは事實である。生命の機微が少數なる實業家の手裡に收められるに従つて、彼等の社會的見識と道徳的精神に期待することが一層必要になつて來た。我等は果していづれの種類に屬するや。

四

奉仕の生活は技倆ある者を満足せしめ、人類に奉仕するために最善の力を盡すことを辭せざるに至らしむるものであるか。人は遊戯の規則に従つて遊戯をなさねばならぬ。若し人類が其規則を變ずることあれば、強者は依然止むに止まれぬ丈夫心に其精力を發揮し、一層の努力を以て同胞の味方となることを喜ぶであらう。孤立の姿となり、人に憎まれ、冷遇されることは決して愉快でない。若し一割の純益を收むるためには長時間の労働と低き賃銀と壓迫とを要し、又六分の純益は好意と満足を示めすとせば、資本主は配當割として得ること尠きも一層高尚なる満足にて之れを補ひ得て餘りあるに至るであらう。

棘腕家に採りてはかくなすことが令名を後世に残すべき好機會である。誰か財産のみを貯へた人を記憶しよう。政治家として後世に名を残した人は民衆と共に又民衆のために苦んだ人々であつた。

自ら進んで奉仕の指導に任ずることは、其齎らす知的結果の如何を見て其正當